
彼女の幸福論

橘高 有紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女の幸福論

【Nコード】

N3880I

【作者名】

橘高 有紀

【あらすじ】

夏、二人の少年が遭遇したのは一晩限定の不思議だった。

01 相談に乗ってくれない？

本当は、あなたを待っていたかった
待てなかった私を、思いを告げることさえできなかった私を
あなたは許してくださいませんか

陽介さん

「あのさあ、巧。相談に乗ってくれない？ ちょっともう、どうしたらいいかわかんなくて」

そう持ちかけてきた山崎の背中を、安易に追いかけたことを、巧は後悔していた。

窓の外では雷雨が暴走中だ。窓ガラスを叩きつける水の礫つぶてが、視界を不明瞭なものにする。合図したようにぎしぎしと床板が悲鳴を上げ、古びたライトが明滅した。突然の暗がりには、巧は眉根を寄せ、立ち止まる。まだ午後の四時前だというのに周囲が薄暗いのは、曇天のせいだ。夕立である。廊下から見える木々は、暴雨を喜ばせるように大きく揺れている。少し前まであれほどうるさかったセミやら虫の鳴き声は、聞こえない。この雨の中、鳴き続ける根性のある奴はいないようだ。いや、もしかしたら雨音に消えてしまっているだけか。

消えた明かりはすぐさま光を取り戻した。

「おい、どこまで行くんや。話ならここらでええやろ？」

ひよいひよいと長い廊下を進む山崎が、ため息混じりに肩をすくめた。

「この先の旧校舎なんだ」

水浸しの渡り廊下を見て、巧はうんざりした。屋根の意味がなくなっていた。立っているだけで顔まで水しぶきが飛んでくる。先に行く、と山崎が走った。意を決して巧も後に続く。梢を揺らす木々に埋もれるように建った、古びた校舎を目指して。

山崎は補習仲間だ。いつも女子からお菓子をもらって食べているイメージが強い。休み時間になるとにこにこして、クッキーやらチョコレートを頬張る姿をしょっちゅう見た。巧はそのたびげんなりしたものだ。甘いものは苦手なので、見ているだけで吐き気がしそらうだった。視界に入れまいとしても、奴の席は斜め前である。嫌でも目に入る。姦しい女子に囲まれ、よく山崎は笑っていた。第一印象としては、調子の良い奴、だ。

しかし、補習で顔を合わせているうちに、単に奴は大食いなのだと気づいた。飯だけじゃ足りないから、菓子にまで手を出していたのだ。

補習中はエネルギーを充填してくれる人間がいないため、いつも机に突っ伏していた。シャーペンを動かすことさえ辛そうで、つい巧が「食うか」と持ってきたおにぎりを分け与えてしまったほどだ。え、くれんの！？ うわあ、サンキュー！ と目を輝かせた山崎に面食らったものだ。ただのおにぎりを、やたら美味そうに頬張るのだから。女子の集っていた理由が何となくわかった気がする。これほど美味しい、美味しい、と食べてくれる相手が、人懐こい山崎ならば尚更か。

しかし、それがまずかった。翌日から顔を合わせるたび「ちょうだい」とでも言うように奴が寄ってくる。飯食つとらんのか、と巧が呆れると、足りねーの、と奴は応えた。お前んとこのおにぎり美味いんだもん、と付け足して、腹に収めていく。

餌付けしてしまったのだ、と気づいたときには遅かった。今では隣に奴がいる。巧、と呼び捨てにされる状態だ。

相談に乗って欲しい そんなことを改めて言われ、柄にもなく気持ちが悪くなった。話を聞いてやるぐらいならい

いか。そう思ったのは、巧が転校生だからだ。高校からこちらへ来たので、厳密には転校とは言わない。だが、関西弁は目だつて仕方なかった。明らかに浮いている。そのせいか、クラスメイトとろくに会話もせずにいる。

偏屈持ちの巧は、それもいいか、と気にしなかった。孤独が苦ではないのだ。

三年間、静かでええやん。氣い楽やん？

そのはずが、何故、豪雨の中、人気のない旧校舎で、ぷち肝試し状態になっている。カツと落ちた稲光と、轟く雷鳴。いったい、俺は何の相談を受けに来た？ 氣のせいかな悪寒までする始末だ。

「山崎、肝試しかこれは」

「悪い。あの女子トイレが待ち合わせ場所なんだよ。というか、俺の悩みの元凶で。……なあこの雨、そろそろ止むと思う？」

きよる、と山崎が不安交じりに空を仰いだ。その傍らで女子トイレ、と巧がうなる。眉間にしわを寄せていると、山崎があわてて、「あっ、別に何かしようつてわけじゃねーから。痴漢とかじゃ断じて！」

「……待ち合わせって？」

疲れたように笑う山崎は、意味深な色を浮かべた。

「来たらわかる」

この旧校舎は夏休みの間に取り壊しが決定した、築五十年を過ぎた古い建物だ。耐震基準を満たさないので、危険指定を受けていたのだ。ひびの入ったコンクリートの壁は、鉛筆か何かであちこちに小さく落書きがしてあった。板張りの廊下は歩きたびきしんで嫌な音を立てる。窓ガラスは傷と汚れで曇っていた。つい最近まで旧校舎は部室棟として使われていたが、現在は封鎖状態だ。あらかた設備が撤去されたここを訪れるのは、肝試しをするためか、密会のためか、不良が溜まるためか。

しかし、この旧校舎には噂があった。いわく 幽霊が出る。

姿はないのに、女の人の声があった。どこからともなく泣き声がし

た。不意に、誰かに触られた感触があった。心靈写真が撮れた。校舎に入つて、突然熱が出た。眩暈がした。といった『被害者』が続出してた。そのせいかな、ここを訪れる者はあまりいない。取り壊し工事でも何かが起こるのではないかな……と期待を込めて話していたクラスメイトを、巧は思い出していた。

幽霊なんか、ほんまにおるんやろか。

山崎の相談が何かわからなかったが、この幽霊関係だったらどうしてくれよう。そんなことを考えて巧は苦笑する。少々頭がファンタジーだったか。幽霊なんてものはありえない。あんなものは、偶然と錯覚のなせる業だ。そう思いつつ、その可能性を拭いきれないのは、巧も非日常を望んでいるからだろうか。

ふと、山崎の足が止まった。旧校舎の突き当たりにある女子トイレだ。右手にトイレの扉。前方には外へ出るための扉と、二階へ上がるための階段。ここか、と巧は四方へ目を向けた。山崎の待ち人がいるはずなのだ。だが、人の気配はしない。山崎は何もない空間に手を向けた。にこ、と笑顔を繕って、

「巧、この人、トイレの花子さんなんだ」

ざああああ、という雨音がやけに大きく聞こえた。

巧は視力の落ちてきている目を眇めて、山崎が示したトイレの扉を見つめた。一応、勉強するときにかけるメガネも取り出した。だが、そこにあるのは古びた木の扉だけである。山崎が「ここ」と示した場所をためつ眇めつしても、さっぱりだ。

「……どこにおんねん」

眉間にしわを寄せて扉をにらむ巧の傍らで、山崎はため息をこぼした。

「ほらあ、やっぱダメだって、花子さん。もしかして男ならOKかなー、なんて思ったけど、巧わかんないってー」

「ですよねえ。この人、ゼーんぜん私の姿、視えてないみたいですよんねえ」

突然二人の会話に割り込んできたのは、若い女の声だった。アニメのヒロインみたいな高く甘い声だ。すぐ傍で誰かが発したようなクリアなそれに、巧が訝って周囲をみやる。メガネをかけた視界でも、人影らしいものは何もない。この場にいるのは、雨で制服を半分ぬらした山崎と巧だけだ。

山崎ががっくり肩を落とした。

「何で俺だけ視えるかなー。他の幽霊が視えるってわけでもねーのに。花子さん絶対何かやっただって。呪い？ これ呪いなの？ やっぱ俺、呪われてるの？」

「失礼ですねえ。私は何もやってませんよお。あえて言うなら波長があつてしまつたつてことではないですかあ？ ところで陽ちゃん、私は花子さんじゃありませんよお」

「波長が合うつて何それ？ もう、ほんつとくに俺困ってるんだから。花子さん助けたい気持ちはあるけど、こつも腹が減つちややつてられない」

巧は用心深くメガネを押し上げた。山崎の台詞に混じつて聞こえる、この声は何だ。のほほんとした、どこかババくさい口調の声は、どうやら空耳ではないようだ。しかし、姿は見えない。辺りを警戒していた巧は、突然小さく飛び上がった。腕や胸の辺りをしきりにさする。今、何かが触れた気がしたのだ。ひやりとした感触に鳥肌が立った。

「どしたの、巧」

「いや、何も無いんやけど」

巧は左右へ目を向けながら一歩、後退した。何やら嫌な予感があった。そうだ。この校舎へ入った瞬間から、嫌な感じはしていたのだ。気持ちが塞ぐような憂鬱さだ。それが、どんどん肥大化していく。

「陽ちゃん……もしかして、この人」

耳元で声が出たそのときだった。巧の背中全体に、氷のようなも

のが押し付けられた。

「うわあああ！？ な、なに？ なんや、え、背中、冷た……！」
悲鳴を上げて背中に手をやる巧へ、山崎がきよとんとする。

「花子さん、離れてみて？」

背中 of 冷気がいつきに取り除かれた。

「花子さん、巧に触ってみて？」

「ちよ、冷たいからやめろ！」

大慌てで逃げると、肩や背中 of 冷たさが、再びすうつと消えた。

どくん、どくん、と心臓が高鳴った。恐る恐る振り返ると、山崎がこちらを凝視している。それからばああ、と光をまいたような笑顔になった。

「まさかわかるの？ 花子さんがわかるの？ あれ、でも見えないんじゃないかったっけ」

巧が舌打ちした。女 of 声が聞こえる。よくわからんけど、変な感触がある。その事実を吐露する羽目になるとは。しかし、もう誤魔化しはきかない。

「やった、花子さん、これで協力者二人目！ 波長が合ったんだよー、巧い」

「やったですね陽ちゃん。こんな素敵な人を見つけてくれるなんて！ 声だけでも十分ありがたいですよ。おまけに感触があるなんて、グツジョブですよ！」

聞き捨てならない単語に、「ちよつと待った」と巧は声を張り上げた。協力者？ 素敵な人？ どういうことだ？ なぜ幽霊と山崎が喜び合っているのだ。

「なあ、相談したいことある言うてたけど、お前、俺に何させるつもりや。事と次第によっちゃただじゃ済ませへんで」

「え？ えーつとねえ……俺の、呪いを解いてもらうためにー」

じりじりとにじり寄った巧へ、しどろもどろ白状し始めた山崎の傍らから、うん、という声が出た。手をぱん、と打ち合わせたような弾み具合で、

「陽ちゃん、私、この子に決めちゃいましたよ！」

「え？ ちょっと待って花子さん。巧はそういうために呼んだんじやなくって」

何が決まったんや。

ビビリモードが入る中、巧の喉がごくりとなった。そろーりそろーりと廊下を戻る。

「どこ、行くんですかあ？ ええっと、巧ちゃん、ですよね？」

嫌な予感的中したか。返事もせずに背中を向けたが、駆け抜けるより一瞬早く、冷たいなにかが覆いかぶさってきた。ぞくり、と悪寒が背中を走る。先ほども味わったアレだ。幽霊が抱きついているのだ。

「ダメですよあ、逃げないでくださいーい。私、あなたに決めたんですからあ」

耳元でささやかれた台詞にギョツとなつて、巧は振り返る。耳を押さえて周囲を見渡したが、こつちへ向かってくる山崎以外いない否、映らない。カツと視界を白く塗り替えたのは、先ほどから続く落雷だ。再び、一瞬だが照明は消えた。

「もう、私には時間がないんです。お願いです、ちょっとの間だけでいいんです」

ささやかれる声は甘ったるく、怖気がした。悲鳴をあげてがむしやらに手を振り回したが、何も当たらない。先ほど消えたライトは明滅を繰り返して光を放った。

「待って、待ってまって、花子さんっ。巧は男だよ！？ 巧を連れてきたの実験だつて言ったじゃん！ なんて決めちやうの」

「陽ちゃん、私はかな子ですよ。それと、もうこの人に決めちやうたんです。陽ちゃんの連れてくる女の子は全員ダメだつたじゃないですかあ。いつ、合子子が現れるとも限らないですもーん」

「決めたって何やねん。なに耳元でごちゃごちゃ言ってるねん。おい、山崎、どういこうこつちやこれ」

まくし立てた巧の声は途中で途切れた。眩暈がしたのだ。何か

『入ってきた』ことに気づいた。いや、もしかしたら何か巧と重なった』のかも。訳がわからず自身を抱きしめた。巨大な冷蔵庫に入れられたような寒気がして、全身に鳥肌が立ったのだ。震えが止まらない。

うそでしょ、なんで、とつろたえる山崎を、巧は前髪の下からにらんだ。

「どついうこつちゃ、これは！」

しかし、返事は意外なところから届いた。

「巧さんのお、お身体をお借りしちゃったのですよー。調子悪いのは最初だけですからあ」

02 俺は呪われたけど、そっちは憑かれてんじゃない

巧の顔から血の気が引いた。山崎がおぞましいものでも見たように、後退する。

「ちょっとだけ、なんです。今晚だけかまわないのでえ」

いつの間にかしおらしく胸の前で合わせていた両手で、巧は口を押えた。これはなんだ。だが、答えはすでに出ていた。先ほどの一瞬で、巧は幽霊に憑かれたのだ！そして、この間延びしたしゃべり方と妙に乙女チックなこのポーズは、巧の意思ではなく……

「何やねんこれ！？勝手に、身体が」

先ほどとは別の意味で鳥肌を立てた巧の直後、小首をかしげて人差し指を頬にあてた巧がいる。足もばつちり内股だ。

「だからあお借りしてますって言ったじゃないですかあ」

勝手に動いた口をばくん、と閉じたのは巧の意思だ。身体が震えるのは、悪寒がするからではない。断じてない。

「出て行け、早く、いますぐに！これは俺の身体や！」

怒髪天をつく勢いで叫べば、直後に同一人物が泣きそうに目をうるませ、身をよじる。

「いやあん、陽ちゃあん、巧さんがいじめますう」

「だ・か・ら！出て行けつってんやるが！」

一人漫才の巧を、ちよつと離れた場所で山崎が腹を抱えて笑いだした。

「そ・れ・で、こいつ誰やねん」

巧が騒ぎつかれたのはそれから十分も経過した後だった。窒息死

する勢いで突つ伏している山崎を蹴つて事情を説明させようと、ようやく思い至つたのだ。落雷と豪雨は急速に収まりつつあったが、今の三人（うち一人は幽霊）にそんなことはどうでもいい。

「さつきも言つたけど、女子トイレの花子さん。自称十八歳の可憐な乙女……ぶはは」

「笑うな」

こちらの顔をまともに見て、また笑いの発作を起こす山崎。ここが人気の少ない旧校舎で助かった、と思う。こんな状況はまともではない。ふざけんな、と拳を巧は握り締めた。だが、幽霊を祓う方法などわからない。とり憑いたもの勝ちなのだ。

「フーか旧校舎の幽霊つて、これか？　これが、あの怪談か」

「怪談つてえ、何ですかあ？」

知らんのか、と巧が頂垂れた。山崎が笑い顔のまま、旧校舎の幽霊の話をする。花子さんがふるふると首を振つた。否、花子さんが巧の身体を操つて首を振らせた。

「私はたしかにお化けですけどあ、花子じゃないですよあ。かな子ですー。私、そんなことしてませんよあ」

「そうなんだよ。この人、ここでずっと泣いてたんだ」

「な、泣いてませんよう、陽ちゃん！　そりゃ、ちよつと寂しくなつたりはしましたけど、ここは学校ですもん。いつだって賑やかですもん」

旧校舎のすすり泣く声は、完全にこいつが犯人だ。山崎も苦笑いを零していた。

「たぶん、靈感がある人？　とかさ、花子さんにシンクロしたんじゃないかなあ」

幽霊の嘆きに影響されて、憂鬱になったり、突然悲しくなったり、頭痛がしたり、吐き気があったりしたわけだ。

「自覚ゼロつて余計性質悪。……それとも他におるんか、幽霊が」

「ええ、私以外にも、何人かは。ここに居るのは、私一人ですけどあ……」

巧は髪をかきむしった。またもじもじと胸の前で両手の指を絡めている自分に、怖気がした。気持ち悪い。勝手に動く身体が不気味で仕方ない。

「うがぁあ、出て行け！ つーか勝手に俺の身体使うな、しゃべんな。キモい！ それで、山崎。お前の相談って結局何や、はよ言え」
花子さんのとろとろした発言を封じ、巧が半眼になって山崎へ問い詰める。笑すぎて涙を浮かべる山崎は、視線を泳がせた。顔が笑いにひきつっている。

「ほら、夏休み中に旧校舎取り壊しでしょ。それまでに俺とここを抜けたいって言うんだよ。今夜祭りがあるでしょ。アレにどうしてもって」

巧が自分と陽介を指差すと、陽介はこくこくと頷く。沈黙が落ちた中、かさこそと聞こえてくるのは、梢の擦れた音だ。そんな中、巧は己の髪をガシつとつかんだ。

「アホぬかせ、はよ出んかいてめー！ なんで俺が山崎とデートせなあかんねん！ つーかなんで俺？ 山崎に憑いて祭り行きやえーやろがー！」

「あ、俺もそれ知りたい！。花子さんに呪われたからか、腹がすぐ減って困るんだよなあ。なんか生氣？ っでの吸い取られてるみたいで。花子さんは元気になっていいけど、俺は困ってるって言うか」「マジで？」

女子に菓子かねだっていたのも、これが原因か。俺に何かと寄りてくるのも。

山崎がこれでもか、と実感のこもったため息を零す。

「言うておくけど、俺より巧のほうがヤバイっしょ。俺は呪われたけど、そっちは憑かれてんじゃん」

げ、と巧が顔に書く。

「失礼ですねえ。私は、悪霊でも怨霊でもないんですよ。立派な地縛霊なんですから。ついでに浮遊霊でもありませんよう」

えっへん、とでも言いたげに巧（に乗り移った花子さん）が胸を

そらした。それでも、何かしらの弊害はあるはずだ。巧は靈感体質というわけでもない。こんな憑依状態など、長時間耐えられるはずがないのだ。今も、じりじりと負荷がかかっているだろう。

「一応俺もね、この役は女の子がいいなーって思っただけで、仲良くなつた子たちと何度か来たけどさっぱりでさ。そしたら巧でいいって言っただけ。詐欺だよ。でも考えてみたら、こんな危険なことお願いもしくいよねー」

「……お前がしたかった相談ってのは」

「成仏してもらおうのに、どうしたらいいか知恵を借りたくて。俺の呪いも解けるでしょ」

「てへ、とかわいらしく山崎が舌を見せても、憤りは収まらない。だったらこの場までくる必要なかったんちゃうか!? 巧は思わず拳を振り上げる。だが、巧は幽霊を信じる性質ではないので、こんな目に合わない限り山崎の話を用いなかったはずだ。舌打ちすると、振り上げた拳を巧は黒髪に差し込んだ。

「出て行けこら! 出て行かんかいこら!」

「うーわー、巧ってば口わるー、などと呟くのは山崎だ。無視して我武者羅に髪をかきむしると、次の瞬間巧は瞳を潤ませた。

「いやあん、出たくないですー。髪の毛引つ張ると痛いですう。やめてくーだーさーいー」

「一五年間生きてきて、一度も発したことがない声色に、巧は震えあがった。精神的ダメージがでかすぎる。

「頼むからしゃべんな。まじキモイ! お前、勝手に身体動かされる気持ちわかって言うとなのか、こら」

「お、怒らないでください……だって、しゃべらないと、私の言葉、伝わらないじゃないですか。私、身体ないんですもん! 身体がないと、いろいろ……大変なんですからね」

「知るか。そつちの都合こつちに押し付けんな」

「あんまり意地悪言うとお、呪いますよ……? いいんですね」

駄々をこねていた少年の顔が、不意に妖艶なそれへ変貌する。氷

片をまいたような雰囲気は、本気だと告げていた。ぎくりとした山崎はあわてて立ち上がる。

「花子さん、そんなこと言ったら巧ますます嫌がるじゃん。巧も、花子さん今日一日だけだから、な？」

二人の仲裁に山崎が入ったときには遅かった。悪寒に吐き気、頭痛のトリプルパンチが巧を襲う。動悸に息切れも伴って立ってられない。床にうずくまって頭を抱える巧は、しばらくうんともスンとも言えなくなった。それは事態を引き起こした花子さんも同じで、二人は同時に沈み込む。

「……わかったわ。今日が終わるまでっつー約束なら」

「……ほんとーですかあ？」

真っ青な顔で巧が了承したとたん、身体は軽くなる。視界が奇妙なほど明るくなった。ふらりと歩きだした巧は、額にびっしり浮かんだ汗をぬぐう。

「でも、俺の身体は俺のもんや。あんたは極力出てこおへんって約束しい。そしたらそこにおってええ。ええな？俺の身体は俺のもんやからな？」

追いかける山崎の目の前で、こくこくこく、と巧の首が動く。

「よし。それでデートって何するん。その辺歩くだけでええんか」
「今夜、祭りあるじゃん、山越神社の。そこに七時待ち合わせで。」

「いいよね、花子さん」

こつくりとあごを引く巧のしぐさは、やっぱり子供っぽくかわいらしい。自分の身体が否応なくコントロールされ、巧がため息をついた。それでも彼女は、しゃべっていないだけ我慢しているのだ。山越神社は、巧でも場所を知っていた。通学路脇にあるのだ。山崎とは神社で待ち合わせだ。

不意に巧が振り返る。目線の先にあるのは女子トイレではなく、さらに通路奥の扉だ。風によって揺れる木々が見えた。外では、雨が実にタイミングよく引けている。祭りは、当初の予想通り開かれるはずだ。巧が瞬く。なぜか後ろ髪を引かれる気持ちになったのは

……、かな子さんを宿しているせいだろうか。

旧校舎のすぐ裏を流れる八多観川の水音が聞こえてくる。

「それじゃ、後で集合な」

身体を動かされながら、自分以外の存在を、頭の中で巧は意識していた。自転車をこいで神社に向かう道すがら、なぜか顔が微笑んでいるのだ。うれしい楽しいといった感情が、巧に関係なく溢れ出す。これは、花子さんの気持ちだ、とわかった。

向かってくる風ひとつ感じるだけで、やさしい気持ちになれた。夕日に伸ばされた自分の影を見ては、泣きそうになった。雨上がりの水溜りを、ジャンプして越えた。道端で遊んでいる子どもたちをやさしく見守って、虫を見つけるとくすくす笑った。自転車に乗るときは大騒ぎしてうるさかった。

地縛霊としてここに残った彼女には身体がなくて、こういう体験だけでも貴重だったのだろうか。巧にとって当り前のことが、輝きを帯びていた。こんなに世界は綺麗だったのだろうか。

(どんな気持ちなんやろうな)

感覚もなにも持たないまま、誰にも認識されることなく、世界にただあり続けるということ。肉体を失ったことのない巧には当然わからない。いろいろ大変なんですからね、と彼女が言ったとおり、きつとそれは、辛くて悲しい。

花子さんは、巧の中で世界を感じようと、アンテナを全開にしているようだった。些細なことでも逃すまいと、今ではなにもしゃべってこない。彼女がしゃべったのは、山崎と待ち合わせた神社についてからだ。

それじゃ行きますか、と連れ立って二人は鳥居をくぐる。すると、花子さんがぼんやりと呟いたのだ。露店や道行く人を眺めながら、『ずいぶん、このあたりも変わっちゃったんですね』

その声は、巧の頭の中だけに響いた。祭りで浮かれる人々の波をすり抜けながら、奥の社を目指す。的屋から立ち込めるにおいと、うるさいほど流れる音楽の中へ、率先して潜り込んだ。そうしたほうがいい、と感じたのだ。花子さんは、的屋を覗いては巧の中で笑い声をあげた。祭りを楽しむ人の笑い声が聞こえるたび、巧の顔がほんのり笑顔になった。

一度奥まで抜けると、花子さんは御社おやしうをしげしげと眺めて、小さく笑った。

『こんなに立派じゃなかったんですけどねえ。少なくとも、私が知っていたここは、いつ崩れてもわからないような場所だったはずなのです。でも、お祭りの雰囲気は昔と変わりませんねえ』

まるで一夜限りの、泡沫を覗いているようです。

過ぎた時間を懐かしむような、惜しむような声は、小さく巧の中で伝わってきた。ちょうどちんの赤い明かりが照らし出す賑わいは、現実であって現実ではない曖昧さがある。着物を着て、面をつけ、ヨーヨーや金魚の入った袋をぶら下げて流れる人々は、本当に人間たちだろうか。もしかしたら花子さんと同じく、賑わいにつられて出てきた、この世ならざる者たちかも。

整備された石畳の段差にしゃがんだ巧は、ふ、と笑いをこぼした。一夜限りの泡沫ならば、非現実があってもいい、と。

そうしていると、彼女の目線は見知らぬ恋人たちのところで度々止まった。ぼんやりとそれを眺めている。もしかしたら彼女は、ここへ誰かと来たのかもしれない。大切な、誰かと。

(強い未練を残すほどの何があつたんやろな)

花子さんを身体の内うちに宿して、彼女が優しい人柄の女性だとわかった。世界を愛することのできる、気持ちの穏やかな人なのだ。だから巧は余計に引つかかっていた。何が彼女を引き留めているのか、と。

「花子さん趣味悪いで。祭り来たかったのに、憑いたのが俺で、選んだのが山崎って。大切な場所なんやったら、もつとマシな人選せ

なアカンやる」

ふふふ、と巧の中で彼女が笑う気配がする。

「私は、あの場所から離してくれる人なら、どなたでもよかったんですよう。陽ちゃんはやさしいから、私のために女の子を探そうとしてくれたんです。けどもう、私には時間が残されてませんから

……」

あの場所から離してくれる人、というのがなんとなく引つかかった。花子さんは、あそこにいたくて留まったのではないのか。

「そっや、なんで女子トイレにおるん？ トイレでなんかあったん？」

03 昔、ここに来たことがあるんですよ

花子さんからの返答はなかった。答えたくない、という意味ではなくて、どう答えたらいいかわからないのだ、と巧には感じられた。巧の中にいる花子さんは、とても存在が軽い。留まることに必死で、それ以外のものはポロポロこぼれ落ちていっているのではないか。彼女自身、何のためにここにいたいのか覚えていないのではないか、という疑問がふわりと浮く。

「……離れられへんねんな」

ぼつ、とこぼせば頭がそろりと頷いていた。花子さんは、行くべき場所を探しているのかもしれない。花子さんは、行くべ

「はい。花子さんへサービス」

突然、山崎が缶ジュースを片手に差し出してきた。巧の表情が和らいだのは花子さんが出てきているせいだ。

「陽ちゃんありがとう。でも私はかな子、なんですよ」

もう口癖のように彼女は訂正する。花子さん、と巧が咎めれば、彼女はぺこりと頭を下げた。出てくるな、という意図は伝わって、こくこく彼女はジュースを飲んでいる。男二人、座り込んで祭りを見渡すのはおかしなものだ。これで楽しいだろうか。

こんなことで、彼女の未練は晴れるのか。

『昔、ここに来たことがあるんですよ』

巧の懸念を感じ取ったのか、頭の中で声が響いた。

『あのお社の前まで来たような気がします。同じ場所のはずなのに、もうぜんぜん違ってるはずですけどお』

巧の脳裏に花子さんの感情が流れこんできた。切ない、悲しい、愛おしい、会いたい、会いたい、会いたい、……苦しい。強い強い

思いの果てに彼女に残されたのは、おぼろげな記憶のみだった。擦り切れたビデオテープのように曖昧で、かすみがかっている。見上げている目線の先にいるのは、だれだろう。顔が、映らない。逆行のように細部がわからない。

『よかった。来てくれたんですね』

不意に聞こえてきた男の声に、巧は息を詰めた。ハッと我に返って四方へ目を向ける。今は、何だ。当然のように覗いてしまったが、今は、花子さんの『記憶』ではなかったか。彼女自身の中で曖昧になってしまっている。彼女の求める『未練』では。

憑かれたせいで、彼女と共感しやすくなっているのだろうか。

「ごくん、と巧は生唾を飲み込んだ。

「花子さん、あんた、なんで、ここがええ思ってたんや」

言いながら巧は腰を上げ、社の前に立った。手を伸ばすと、古びた賽銭箱がある。それをすつと指でなぞった。この賽銭箱は、もしかしたら花子さんの記憶にあるものと同じだろうか。

「巧ちゃん？」と花子さんがきよんとする気配がある。

「ぼろぼろやったこの場所で、誰に会いに来たん。ここで、何があったん」

それは、と花子さんが言葉に詰まる。巧の両手を持ち上げ、ゆつくりと顔にあてがった。ぎゅ、と臉を強く下ろす。それは？

『返事を、聞かせてください』

再び男の声が聞こえた。低く優しい声だった。擦り切れた記憶が再生されていく。

臉を上げた巧の視界が惑う。古色を帯びた社が重なった。踏みしめる石畳も形が不ぞろいで、欠けたものへ変化する。わびしさを漂わせる蒼然とした神社が現れた。夜が昼間に塗り変わる。夏だったのだろう、青々とした葉を木々が茂らせていた。セミの鳴き声も聞こえてきそうだ。この場所へ、花子さんは来たのだ。大切な人へ会うために。何度も周囲を確認しながら、人目を忍んで。

誰か見ていないか。近くに津路崎の家の人はいないか。

視界が巧の意思とは無関係に動いた。目線がぐつと低い。これは、花子さんの目線だ。感覚、感触も彼女のもの。記憶の中の花子さんが俯けば、自然と足元を巧も見っていた。鼻緒が見えて、ぎくりとする。彼女が身に着けているのは、木綿の地味な着物だ。腰にエプロンをしていた。前方にいる男の足も見えた。こちらも和装だ。ただし、生地の手つきがしっかりした袴姿だった。怯えるようにゆっくり、目線が上がっていく。ぼさりとした髪が見えた。影のようなシルエット。『かな子さん』

呼ばれて、花子さんが身を竦ませた。瞼を閉じたのだろう。記憶を覗いている巧の視界も真っ黒になる。答えちゃダメ。そんな意思が伝わってくる。微かに首を振ったのは、俯いて両手を顔にあてがってからだ。その両手は水仕事で荒れていた。がさりとした感触が頬にある。

『お願いです。俺を見て言ってくれませんか』
顔を見ちゃダメ。

花子さんは、なにも言わなかった。口を結び、降ってくる言葉に對し、ただ面を伏せていた。男が触れようとする指先さえ、彼女は拒んだ。身を固くして小さくなったのだ。だが、頑なな態度をとりながら、彼女は決して逃げようとはしなかった。それが余計に男を苦しめると知っていても、耐えるように彼が諦めてくれることを祈った。

強い彼女の感情に触れ、巧は訝しく思う。……なぜ？ なぜ花子さんはあんな態度を取った？ 花子さんは、あの男を好いていたのではなかったのか。

「み？ おーい、どうしたんだ、巧？」

気がつくくと、至近距離でこちらを覗き込む山崎がいた。きゃ、と頭の中で弾けた悲鳴は花子さんのものだ。のけぞって巧は後じさり、止めていた息を吐き出す。心臓がどくどくと暴れていた。

「どしたんだ？ いきなりぼつと突っ立って」

巧は「ちやう」と頭を振る。ぐちゃぐちゃと髪をかき回しながら、

ちやう、と繰り返した。荒い呼気の巧を、山崎が不思議そうに見ている。飲むか、と渡されたジュースを遠慮なく受け取って、喉へ流し込んだ。彼女の記憶を共有するだけで、体力を消耗するのか。汗がこめかみを伝って落ちた。何やこれ、と巧は歯を食いしばる。

「巧ちゃん、と呼びかけてくる声は内側から響いた。心配してくれているのが、声色でわかる。」

息が整うのを待って、巧は口を開いた。

「今、かな子さんの、記憶の断片が、流れてきたんや。未練の、ありどころ」

「ええ？ 花子さん、この祭りが未練じゃなかったんだ」

「ちやう。祭りやない。かな子さんが来たかったんは、ここや。この、社の、前」

驚いたように山崎が社を振り返る。その山崎を置いて、巧はふらふらと祭りで賑わう境内を歩き出した。立っているだけで、辛いが、次に行くべき場所はわかっていて。

「つても、それが未練やない。ここは思い出の場所なんや。大切な人に会った（おうた）大切な……でも、まだ足らん」

何故かな子さんは、あのような頑なな態度を取ったのだろう。彼女の記憶に触れている間は、ダイレクトに感情が伝わってくるのだ。何故、あんな風に男を拒絶したのだろう。巧はかな子さんに呼びかける。

「かな子さん、さつき出てきた人、誰や」

出てきた人、とかな子さんが小首を傾げたような気がした。巧が記憶を覗いても、彼女にはどのシーンが流れたのかわからないらしい。男や、と巧が付け足す。着物を着ていた。柔らかい低い声色をしていた。身長は、恐らく巧ほどもある。年齢は、二十歳を過ぎているはずだ。だが、

「何でやるうな……細いイメージあったわ。あの人、身体弱かったんちやうかな。あんまようわからんけど、そんな雰囲気しとった気がする。なんや思い出さへんか」

男の人、とかな子さんが繰り返した。気のせいか、声が震えている。

「あなたに、あの社の前で返事聞いてたんや。……なんの話かわかるか」

慎重に発した問いかけは、後半は苦虫を噛み潰したようになっていた。あれは、恐らくプロポーズの返事を尋ねられたのだ。そうわかっていて問いかけている。意地の悪い質問である。

「何で、ちゃんと返事せえへんかった」

巧の台詞をかな子さんが遮った。

『巧ちゃん！……それ以上は、やめてください。何か、何か今、一瞬、何か』

それきり、かな子さんが沈黙する。しばらく待っても反応がないので、巧は判断に迷った。かな子さんが、怯えている気がしたのだ。……何に、対して？

実を言うと、巧はかな子さんが喜ぶ、とまではいかなかったも、プラスの方向で反応してくれることを期待していた。あの男が未練の原因なら、二人が結ばれたことを思い出してくれれば、彼女は成仏できるのではないかと、と。

いや、できへんか。

短慮だった自分を巧は責めた。かな子さんのあの反応は、何かある。そういえば、記憶の中の彼女は、地味な着物を着ていた。丈が短く、色あせたものだ。男のほうは、仕立ての良さそうな格好だった気がする。……身分の差、か？ 行き当たった自分の考えに、巧は胸糞が悪くなった。

かな子さんは、男と身分に差があったため、身を引いたのだろうか。成就しなかった思いが、未練となっているのか。

ふらつきながらも黙々と歩く巧に追いついた山崎が、「どこ行くんだよ」と問いかけてきた。一瞬、巧は躊躇った。このまま先へ進むことが正しいのか、不安になったのだ。かな子さんは依然沈黙を保っている。

「津路崎で、でかい家わかるか」

「んー……津路崎、津路崎、津路崎……って、あ、あそこ？ 幽霊屋敷の」

「幽霊、屋敷？」

予想外の回答に、巧は顔を引きつらせた。まさか幽霊屋敷になっているとは、思いもしなかったのだ。

「この辺りじゃ有名なんだけど。よく小学生が忍び込んだりしてって、待った。そこ行くとか、言わないよな？」

巧はにこお、とわざとらしい笑みを作った。ぽん、と山崎の肩に手を置き、指にぐぐぐつと力を込める。逃さないからなあ、という意思を込めて。

「案内せいな？」

山崎が顔を引きつらせた。祭りなのに、と無念がる声は、このさい無視することにする。

「でもさ、なんで津路崎なんか花子さん、来たがったんだ？ 何もないよ、あそこ」

自転車をこぎながら巧が、ちやう、と否定した。目指すべき津路崎は自転車で走って十分ほどの場所にあった。街頭もまばらの夜道を、二台の自転車が通り過ぎて行く。

「俺が、来るべきや思てん。さつき『視えた』かな子さんの記憶ん中でな、ふつと浮かんだんや」

「なんや、因縁ありそうないしてな。」

そう伝えると、ふうん？ と山崎が曖昧な返事をする。あ、そこ左、と指示されながら進むと、学校裏を流れる八多観川に出た。その堤防沿いにしばらく進むのだ。暗い川がなんとも不気味で、目を逸らしながら進んだ。最近の雨で、水かさが増した川は落ちればきつと一たまりもない。

「こつちこつち」

山崎の自転車が堤防を降りていった。その先は街頭がポツポツあるのみの暗がりだ。住宅街を抜けたのだ。徐々にアスファルトが自然に浸食されていた。雑草が増えて、カエルや虫の鳴声が多くなる。田んぼの脇から竹林が山の麓へと広がっていた。あおい稲の揺らぎに紛れ、ビニルハウスや畑もぼつぼつとある。

「この辺り一帯を津路崎って言うんだ。で、あれが」

前方に、ぼつんと建った家がある。田園地帯に入っただけのころだ。竹林を背景に、かなり大きくて立派な日本家屋がある。なるほど、幽霊屋敷とはよく言ったものだ。遠目でも屋敷の屋根が崩れているのがわかった。垣根がぐるりと囲って、立派な門もあるのに、それらもぼろぼろで廃墟も同然である。どれぐらいの間、手入れされずに放置されてきたのだろう。

「……古風な家、やな」

自転車をとめて、巧は眉間のしわをいっそう深くした。隣では山崎が肩をすくめている。

「だろー。どうする？ 中、入る？」

二人の前に佇む屋敷は、威嚇するように、頼りないライトの下でその姿を晒している。門扉だけでもかなり大きかった。黒ずんだ板の門は、かたく閉ざされていてビクともしなかった。その脇にある小さな扉も同様だ。この様子だと、裏側からかんぬきか何かで固定してあるのだと思う。門もガタがきていて、所どころ土壁ははがれて骨組みがむき出しになり、屋根瓦が落ちて路上で割れていた。よく見れば雑草があちこちから飛び出ている。

あれ？ もしかして、この門は、門番が暮らせるようになってるんちゃうやろか。ふとそんな考えが浮かんで、巧はため息をこぼした。土地だけなら巧の小さな自宅が、六件は建ちそうな広さがあるのだ。

門より低い垣根から覗いた屋敷の二階は、回廊のようだった。ぐるりと廊下が部屋を囲った造りだ。雨戸は閉ざされていたが、もし

かしたら内側はガラスではないのかもしれない。視野を転じると、庭がある。荒れ放題の広い庭だ。そこだけでも家が数件建ってしまふほどあるだろう。雑草が好き勝手に伸び、造られた池は藻や水草が水面を覆っていた。あちこちに大きな穴が開いているのは、庭園ならあつて然るべき木々を掘り返して移動させた跡か。

今は見る影もないこの家が、相当な権力者の屋敷だったことを窺わせるには十分だった。

04 うそなものか

「中入れるんか」

「裏へ回ればいいよ。戸板が外れていたはずだし。それかぐるつと行った先で、垣根が途切れてる」

小学生のころ、俺もよく来たんだよなーと山崎が笑みを浮かべている。できれば入りたくないのが、巧の本音だった。巧は沈黙を保ち続けるかな子さんへ呼びかけた。少し警戒しながら、

「かな子さん、かな子さん。ちよつとそっぽ向いとらんで、出てきいひんか」

どうかしたの、と山崎が訝っているが、無視だ。

「なあ、この家、見覚えあるんとちゃうか」

巧の声に誘われるように、ゆっくりと顔が動いた。最初は暗い視界でここがどこなのか、把握できなかったのかもしれない。しかし、門を見て、その向こう側から覗く屋根を見て。周囲の田んぼを見て。かなさんが徐々にパニックを起こし始めたのを、巧は感じていた。足が勝手に後退した。目が徐々に見開かれ、呼吸を忘れる。どくん、と心臓が強く跳ねた。どくん、どくん、どくん、と。

「この、恥知らず。恩をあだで返すとはこのことだよ。何もできないお前を拾って、育ててやったのに。お前のせいで、お前のせいで
！」

突如聞こえた女の声に、かなさんは飛び上がった。ああああああああ、と頭を抱える。山崎が仰天して固まった。巧の身体を操るかなさんは、かがみ込んで小さくなった。すみません奥さま、すみません、すみません、すみません、と謝りながら、身体を震わせる。

「なあ、巧？　かな子さん？　大丈夫なのか、おい、ちょっと、聞こえてる？」

膝についてこちらを窺う山崎の声が、遠のいていく。かな子さんの悲鳴と、かな子さんをなじる声で、巧の頭の中は溢れかえった。予想以上の荒れようだった。まるで嵐だ。彼女にとつて毒であると承知していたが、まさかここまで強い反応を示すとは。強い意識に呑まれ、巧も振り回される。

何とかこらえて顔を上げると、開かれた門が見えた。ぎくんとする。閉ざされていたはずの扉が開いている。今は夕方に近いのか、茜色をした屋敷がその奥にある。玄関へと続く整えられた石畳と、剪定を受けた木々。過去だ、とわかった。

かな子さんがきびすを返し裏口へ回る。使用人は表から入ってはいけない。頼まれていた使いから帰ってきたのだから。しかし、小さな裏門をくぐったところで、横面をはたかれた。見知った顔に、ただいま、を言う暇もなかった。手に持っていた包みが転がり落ちた。え、と訝る間もなく、怒鳴り声が叩きつけられる。

『かな子、お前、自分が何をやったかわかっているの。お前、言っただろう、お断りをしてくるって。私はそれを信用したんだ。それが、それが……！』

かな子さんに向かって声を震わせているのは、丸みを帯びた体つき、中年の女だった。かな子さんと同様に色あせた着物を身に着け、腰にエプロンをしていた。ふくよかで優しい顔色を怒りに染めている……のだろう。かな子さんの記憶は、細部が抜け落ちている。蔵のようなものが見え、屋敷の裏口だと思われる戸から、土間が見えた。その少し右奥にあるのは、井戸だろうか。

『この、なんてはしたくない　私はお前を七つから面倒見てきたけどね、そんな風にしつけた覚えはなかったよ。ああ、奥方様に顔向けできやしない。なんてはしたくない子なんだ』

言いながら中年の女は手のひらを振り下ろす。何度も何度も、顔をかばうかな子さんへ手のひらは吸い込まれた。叩かれながら見た

女は、今にも泣きそうな気配をまもっていた。手ひどい裏切りを受けたと訴える口調なのに、全身でどうして、と問いかけて、嘆いていた。

『待ってください。ちゃんとお断りをいたしました。若様には、ちやんと……』

『嘘をお言いでないよ』

ぴしゃりとした怒声が、かな子さんの言を封じる。

『じゃあ、どうしてあの方が出兵なさるんだい。軍へ志願なんてことを言い出すんだい。若様は、お身体が丈夫でないことぐらい承知しているだろうに。あの方は戦争へは行かなくてよかったはずなのに』

うそ。

かな子さんが凍りついたのを見て、中年の女が泣き崩れた。手で口元を覆って嗚咽をこらえている。彼女も、かな子さんが知らないことを承知していたのだ。しかし、言わずにおれなかった。

『うそ、うそ！ どうして急に志願なんて』

『うそなものか』

うそなものか……、肩を震わせて女は繰り返す。かな子さんは固まったりきり、動けなくなつた。立ち尽くしたまま、女の背中を見ていた。生暖かな風が、やけに気持ち悪かつた。

ざざざつと視界が曖昧になり、場面が切り替わる。そこは屋敷の裏手だと思われた。

視界が地面を這っている。呼吸をするたび、砂がわずかに舞い上がった。鼻では上手く息ができなくて、口からだ。視界に広がった黒は、恐らくかな子さんの髪だ。真っ直ぐの癖のない髪だった。そのすぐ傍に赤い色が見えた。あれは、かな子さんの血だろうか。

鮮烈な太陽の光と深い緑の匂いで、夏なのだとわかつた。身体中が酷く痛む。何もしていないのに、痛みで意識が朦朧となるほどだ。視界が騒る。どうやら周囲にだれかがいる。一人ではなく、三人、四人とかな子さんを囲っている。影人形のように真っ黒な人物は、

逆光のせいでそう見えたのか。

ちやう。かな子さんは、この人らを忘れてしまいたいんや……。

『起きなさい。まだ話しはすんでないの』

身を起こせずにいるかな子さんの背中を、誰かが蹴りつけた。がは、とかな子さんが衝撃にあえぐ。全身の痛みは、誰かになぶられたせいなのだ、と巧は気づいた。

『起きろと言われているのがわからないのか！』

命令が降ってきて、どうしようもできなかった。起き上がるための力が、腕に込められない。まして、背中を足蹴にされては、起き上がりようもないではないか。

『水をかけて。意識を明確にさせて』

命じるこの声は女だ。津路崎を訪れたとき、最初に脳内で響いた『恥知らず』と怒鳴る声に、似ている気がした。ならばこの人が『奥方様』なのか。

ばしやり、と本当に水をかけられて巧はぎよつとなった。井戸の水が頭から胸の辺りまでをぬらす。びりびりと冷たかった。かな子さんが身体を折り曲げてむせた。着物や髪が、肌に絡みつく。

ちよつと待てや、そこまですんのか。強い怒りが沸いた。かな子さんが対等の人間として扱われていなかった事実が、信じられなかったのだ。

ぐつたりと倒れたかな子さんのあごを、誰かがつかむ。無理やり顔を上げさせられ、くらりと眩暈がした。視界が定まらないため、至近距離で見たはずの相手の顔さえ定かでないのだ。女の声が聞こえる。命じることに慣れた奥方様の声だ。

『お前が、あの子を誑かしたんだらう。え？ もう一度聞いてあげる。何が目的なの、言っご覧。津路崎の家か、金か。この汚らしい身体を使つて、唆したんだらう』

頬を叩かれた。何度も。女が何かを言うたび、左右の頬に衝撃が走る。

『あの子にはねえ、あんたなんかとはちがう、ちゃんとした許婚が

いるんだよ。学のあるちゃんとしたところのお嬢さんだ。お前が知らなかったとは、言わせないよ!」

ひととき大きな音と共に、視界が回る。次に肩が硬い地面に叩きつけられた。ああ、殴られたせいで、身体が女の手を放れたのだ。頬を地面にこすり付けたかな子さんの視界は、地面を映した。しかし、それで終わるはずもない。

次の瞬間、側頭部に痛みが走った。頭を踏みつけられたのだ。口の中に砂利が入ってきた。悲鳴を上げる気力もかな子さんには残されていまいようだった。されるがままに、倒れている。見ていられず、やめろ、と喚いたのは巧だった。やめろ、やめろ、やめろ！これじゃリンチやるが！

しかし、巧は傍観者でしかない。かな子さんの過去に、記憶に干渉できない。

再びシーンが切り替わった。今度は、暗い部屋だ。ぼんやりと低い天井を見つめたかな子さんは、目だけを動かして、ここが屋敷はずれの蔵であることに気づいた。埃をかぶった大小さまざまな箱がひっそりと存在していた。あれらは皿や茶器をおさめた箱だ。かな子さんも、ここへたびたび出入りしていたのかもしれない。低い天井で区切られた二階部分には、巻物や書物が置いてあったのを、知っている。

ひんやりした空気が心地よかった。向かいでは、立ち上がったも手が届きそうにない位置に、小さな窓が光を暗がりにも浮かび上がらせている。埃がきらきらと輝いていた。今は昼間なのか。それともあれは眩い月明かりなのか。

背中がちくちくするのは、敷かれたわらのせいだ。ぼうつとしながら手を持ち上げると、手当てされてあったのがわかった。だれが、してくれたのだろうか……。力ない疑問に、脳裏をいくつかの顔が通り過ぎる。これも細部は潰れていたが、そのうち一人は、二つ前のシーンでかな子さんの頬を張った中年の女性だ。ああ、彼女はかな子さんにとって、母のような人だったのか。

きしんだ音を立てて戸が開いた。光の中から、誰かが顔を覗かせる。誰何しながら身を起こそうとした彼女の耳に、ぷ、とあざ笑う気配が届いた。かな子さんの身が、強張る。

『ほら、水だよ。奥方様に言われてんだ。そろそろ動けるようになったら？ こつちへ来て飲みなよ』

差し出されたのは、水汲みよりの桶だった。同じ女中の誰かのようだ。婀娜っぽいしゃべり方だ。暗がりから、かな子さんはゆっくりと這うように移動した。起き上がるのも苦痛だったが、水は欲しい。喉がからからに渴いていた。腹も減っている。どうしようもない飢えに、目が回りそうだった。全身の痛みからして、リンチにあつてからさほど時間は経ってないだろう。いつから、かな子さんはまともな食事を取っていないのか。

ずり、ずり、と這いつくばって戸口へかな子さんは向かう。それを眺める女は、唇に笑みを引いていた。

『ほら、飲みなよ。いっぱいあるんだから』

そう言つて、かな子さんの前で女は桶をゆっくりと、ひっくり返した。少しずつ水が落ちて、足元をぬらす。燐光を撒きながら、どンドン零れ落ちていく。

『飲みたかつたんじゃないのお？』

かな子さんの指先まで、水は広がった。これを、舐めると。

指先についたそれは、砂が混じつてにごつていた。屈辱である。

桶から零れ落ちる水へと手を伸ばすと、女はあざ笑つて、桶を後方へ投げ捨てた。音を立てて、水がばら撒かれる。

巧は「こいつもか！」と怒鳴つた。怒りをあらわにしても通じないとかわかつていて、怒鳴つていた。

こいつもか。人をなんやと思つてんのや。なんでこいつらは、かな子さんに手え差し伸べようとせえへんのや。同じ家の者やるが。ただ、仕える家の男を好いただけやるが！ 何があかんねや。かな子さんは、ちゃんと断つたんちゃうんか！ どうせえ言うんや！

しかし、巧がいくら憤つても、映像の中の人物には届かないのだ。

女は呆然と桶を見つめるしかできないかな子さんの耳に、囁いた。埃っぽい暗い空気に悪意が広がっていく。それは、毒のように。

『ねえ、どうやって若様に近づいたのか、教えて頂戴よ。身体を使っただけで本当？』

たぶらかしてなんかない。そんなことしていない。あの人と私はそんなものじゃなかった。

胸中で悲痛な叫びが響く。喉がひりついて、声にならなかったのだ。だから、悔しそうに女を仰ぐしかできない。

『おとなしい顔して、怖い子だね。お前みたいな汚い子、本当に若様が相手にしたの』

あの人は、そんな人じゃない。心のやさしい人だった。陽だまりみたいな人だった。私みたいな端女にもお優しくかった。私は、あの人を見ていただけよかった。それ以上を望んだことなど、ただの一度だって、なかった。

なかったのだ、視線が交わる一瞬。言葉をかわした一瞬だけで、心が満たされていたから。

悔しさで涙がにじんだ。この女はかな子さんを貶めることで、自分が仕える家の子息まで貶したのだ。きやらきやらと笑っただけ笑って、女は出て行く。かな子さんは唇をかみ締めた。その拍子に唇が切れたのだろう。血の味がした。

女は戸を閉めていかなかった。眩い光の向こう側では、忙しなく働く家人がいる。かな子さんが欠けても滞りなく回る日常がそこにあった。助けを求めるように外を見つめ、扉を支えに何とか立つと、ふらりと光の中へ出る。その途端、膝が笑ってどうと倒れ込んだ。日向の地面は、熱を帯びていた。着物からむき出しになった素肌を、容赦なく熱した。声にならない悲鳴が上がった。

『かな……？』

声のした方向をかな子さんは見やった。そこに女の子が一人いた。恐らくはかな子さんとさほど代わらない年齢なのだろう。顔色を変えて走り寄ってくる。

『だいじょうぶ？ 起き上がれないの』

肩をつかまれて、かな子さんが喘いだ。痛みが走ったのだ。ごめんね、と女の子は触るのをやめる。そうして息を呑んでいた。彼女の視線は、かな子さんの鎖骨辺りを見ている。かな子さんは、手で隠すように着物のあわせをつかんだ。

見られた。見られてしまった。

『ひどい……痣が……。どうしたの、かなちゃん。だれがこんな

』

言いかけて、少女が口を閉ざす。

05 話しとかなあかんことが、ある

『かな子に開くのはやめときなさいよ、きょう子。それは罰なんだよ。若様をたぶらかした、ね』

横合いから飛んだ鋭い忠告は、先ほど桶を持ってきた女だ。

『だとしても、これは……やりすぎです。女の子の肌に、どうしてここまで』

『追い出されてないだけマシってもんさ。これ以上首突っ込むのはおやめ。あんたじゃなくて、あんたのお父さんが困ることになるよ。奥方様に知れたらね』

きょう子と呼ばれた女の子は硬直した。逡巡と怯えが伝わってくる。

津路崎とこの女の子の繋がりには巧にはわからなかったが、取引先とか、大家と店子みたいな関係なのだろうか、と推測できた。かな子さんの事情を知らず、憤りを露にできたことから、それぐらいの距離があると踏んだのだ。だとしたら、父親や身内を引き合いに出されては分が悪いだらう。

どうしよう、とでも言うように、きょう子はこちらを振り返った。その表情は、助けられない悔しさを訴えている。ああ、この人は、かな子さんを助けられない。かな子さんを助けられるほどの、立場にいない。

かな子さんの失望が巧に伝わってきた。失望と言うよりは、諦めか。『奥方様』の怒りを買うことは、龍の逆鱗に触れることと変わらないらしい。

きょうちゃん……。かな子さんが友だち呼んだ。かすれた声だったが、必死の思いで呼んだのだ。微笑を浮かべながら。

『かなちゃん……。ごめんね。私、何もしてあげられないよう……。』

でも待つて。お水だけでも　と、立ち上がった少女を咎める声がする。

『何をしているの！　用が済んだらとっととお行き。八郎さんが外で探していたよ』

きょう子がぎくり、と肩をはずませた。かな子さんが身をよじる。嘘をお言いでないよ、と泣き崩れた中年の女の声だった。

『でも、たえさん、かなが……お水だけでもあげちゃダメですか？』
中年の女は、丸い身体を揺らしながらこちらへ近づいてくる。きょう子の手を取って、裏口へと促す。

『かな子は、罰を受けてるんだよ。あんた、何もしちゃいないね』
『でも、あんなに酷い怪我が』

『お黙りよ。きょう子……向こうから奥方様をご覧になってる。わかるね？　あんたが余計なことをしたら、八郎さんがどれだけ困ることか』

低い囁きはどれほど効果を生んだのか。ああ、とかな子さんが目を伏せた。行ってしまう。叱責される前に、立ち去ることを決めたのだろう。『すみません』ときょう子はきびすを返す。

『……お腹がすいたろう。あとで、何か食べられるものを持っていくからな』

それだけを残して、中年の女も去っていく。視界から消えてしまう。行かないで……。置いていかないで……。涙が、頬を伝って落ちた。かな子さんに気づいた者たちは、ある者は視線を逸らし、ある者は薄笑いを浮かべ、ある者は気の毒そうにしながらも去っていく。日常という枠から弾かれた者は、これほどのけ者にされきやいけないのか。

しばらくしてかな子さんは、また納屋へ連れ戻された。門番をしていた男が引きずるように、わらを敷かれた寢床へ放りこんだのだ。すぐさま扉を閉じる重たい音がする。かな子さんが身をよじった。いや、やめて。お願い。喉を絞って懇願した。お願いだから……。

身体に力が入らないのだ。懇願した声もか細いもので、扉を閉め

る音にかき消されたかもしれない。がしゃん、と錠を下ろす音が響いた。

そしてまた、世界は暗転する。

ひそひそと紡がれる声が、闇の中で響いた。

身分違いも甚だしい。あの子は金が目的だったらしいよ。卑しい女。あんな恩知らず、見たこともない。身体を使って誘惑したらしい。女を使うのはあの娘の手段だ。はしたない。なんて常識知らずなのか。あんな娘とは関わらないほうが身のためだ

方々からそれらの声は聞こえてかな子さんを苛んでいく。女の声で、男の声で、さまざまな色を変えて。

もうええ。もうええ、見たない！

巧はついに音を上げた。彼女は虐げられてきたのだ。大切な人との思い出しには、こんな苦しいものもセットになっていたのだ。信じられなかった。あれほどおっとり話すかな子さんに、こんな過去があったことが。あれほど世界を愛しているかな子さんが、ここまで傷つけられなきゃいけなかったことが。

そして、闇が再び切り裂かれた。

虚ろなかな子さんは腕を引かれ、無理やり表へ引つ張り出されていた。庭を抜け、本邸へと通される。その広い玄関口で正座をさせられた。袖口からやせ細った腕が見え、巧は苦い思いでいつぱいになる。唇が、肌が、がさりと荒れていた。リンチを受けた傷は治っていたが、精神的な傷は癒えていないのだ。こんな、ぼろぼろの彼女が、かな子さんだと巧は思いたくなかった。巧ちゃん、と呼びかけてくれる彼女だとは。

そこへ、玄関を飾っている屏風の向こう側から、女が現れた。従者を引き連れて現れたその女の横柄な態度から、例の『奥方様』である。巧は直感する。いくらかな子さんの記憶から顔の造作が薄れようと、これだけは言い切れた。

女主人はこちらを見下げて、ふ、と鼻で笑った。そしてかな子さんは言い渡されたのだ。裁きを下される罪人のごとく。

『お前に婚姻話があるんだよ』

決して大きな声ではなかった。むしろ囁きに近かったはずだ。かな子さんが、信じられない思いで顔を上げた。そこに映る女性の顔は不明だったが、にいと笑ったのだけわかった。驚愕したかな子さんの反応を嘲った気配が、そこかしこでした。

そうやったんか。

巧は齒噛みした。そうやったんか。このために、かな子さんを甚振って、納屋に閉じ込めたんか。手当てしたんも、このためか。逃げられたらかなわんてことか。どこまでかな子さんを貶めたら気が済むんや！ 息子の周りに姿も見せるなてことか。知ってる奴のとこ嫁がせて、飼い殺しにしたる言うわけか。

かな子さんから、血の気が引いていく。かちかちかち、と齒が鳴った。『奥方様』が何かを言っているが、耳に入らない。

これほどの、『罰』はない。

なんて、むごい。

『わたし……私、は……結婚、なんて……』

一緒になれなくとも、あの人の姿をそつと見守られたらよかったのに。

穏やかに日々を暮らすあの人がいるだけで、よかったのに。

それさえかな子さんには、許されていない。

『あなたには勿体ないほどの良縁だ。この話、受けるね？』

『私は、結婚なんて……』

ぱしん、と頬を打たれた。

『はいつて返事しか聞かないよ。お前はどれだけ私の顔に泥を塗るつもり』

……み、……つぶか、……くみ、……こさん。たくみ、はなこさん……

がくがくと肩を揺さぶられている。耳元で騒ぐ声がする。今度は何や。今度はどんな事態が待ち受けてる言うんや。

「おい、しっかりしろよ。どうしたんだよ、いきなり倒れて。巧？ 花子さん？ おい、返事しろよ」

山崎？

その名前が浮かんだ途端、巧の意識はクリアになった。ぱつちり脛を押し上げると、山崎の顔が飛び込んでくる。ぎゃ、と巧が仰け反ると、山崎は安堵の息を零した。

「ああよかったあ、目え覚ましたあ」

くしゃりと顔を歪ませて笑うものだから、巧のほうが面食らう。

そうだ。津路崎の屋敷まで、山崎と来たのだ。巧の右手には、妙な存在感を放つあの門がある。

「お前、いきなり叫び声上げて、倒れたんだから。大丈夫か」

ああ、そうだった、と頭痛をこらえて巧は思い出す。この家をかな子さんに見せた途端、嵐みたいな感情の奔流に巻き込まれたのだ。その後は、過去をツアー状態で無理やり引っ張りまわされた。

お前は、どれだけ私の顔に泥を塗るつもり。

怨念のような囁きを思い出して、ぶるりと巧は身震いする。心配そうにしている山崎へ真つ青な顔を向けた。

「お前に、話しとかなあかんことが、ある」

今にも卒倒しそうな巧が、自転車を支えに歩き出した。にじみ出た汗が、ぐっしょりと身体を濡らす。かな子さんの、水をかけられた記憶が脳裏に浮かんだ。ひどい徒労感だった。立っているだけで辛い。それでもあの時のかな子さんよりマシだと、自転車を押しながら思う。リンチを受けたわけではないし、全身も怪我だらけではない。それに

「わかったけど、どこ行くんだよ」

山崎がいる。

どこでもよかった。早く、この津路崎から立ち去りたかった。粘つく闇が追いかけてくるようで、胸が塞ぐのだ。

巧に合わせて山崎もスローペースで自転車を進める。両足で蹴るようにして進むのだ。角を曲がって、津路崎が見えなくなつて、やっと巧は人心地ついた。振り返ろうとは思わない。再びあの過去に絡め取られそうな気がしたので。

腹減つてねえ？ という山崎の提案で、コンビニに立ち寄つた。明るく人の出入りが多いコンビニを見ると、帰つてきたのだ、と強く思えた。先ほどまで感じていた息苦しさがすうっと消えていく。現代のよさをかみ締めた。なぜかバイクや車の排気ガスさえ恋しくなつてくる。

そしてインスタント焼きそば、から揚げ、おにぎり、ジュースを、あつという間に平らげた。予想以上に飢えていた自分に驚く。だがそれだけではなかった。腹が膨れれば、先ほどまで巧を襲っていた徒労や頭痛が和らいだのだ。心なしか、エネルギーを充填したお陰で身体も軽い。コンビニをバックにして座っているだけで、体力が回復していくのがわかる。

山崎はやっぱり、としたり顔だ。

「花子さんの傍にいと、それだけで腹が減つたもんなあ。何か口に入れるとだいが違うんだよ。それで、花子さんどうしたつて」

巧は頭の中を探ってみた。今となれば、彼女の存在を感覚的に察知できる。

「今は、閉じこもってる感じじゃ。ちょっと荒療治が過ぎた言っんか……俺も、ヤバかつたしな」

そうして巧は語つた。かな子さんの過去を、現時点でわかつていることすべて。山崎はかな子さんの受けた仕打ちに、たいそう腹を立てた。なんだよそれ。そんなことする権利あんのか。犯罪だろ！だが、話が進むにつれ今度は怯えだした。どうしてそこまでできんだよ。信じらんねえ……。マジでそんな目にあつてきたのかよ……。

頂垂れた山崎の落ち込みはすさまじい。膝をだいて、顔をうずめて負の空気を撒き散らしている。何と声をかけようか、巧が迷つた

ときだ。突如山崎はペットボトルをあおいだ。スポーツ飲料をぐい
ーっと一気飲みし、空になったボトルをゴミ箱に投げ入れる。

「っしや、落ち込み完了！ まだ足りないからもちよっと何か買っ
てくる！」

肩を怒らせ、アスファルトを叩きつけるようにして歩きながら、
コンビニへ入っていく。すぐに山崎はポテトチップスやチョコレー
ト、菓子パンを袋に下げて出てきた。巧の隣へどっかりと座り、真
面目な顔で尋ねてきた。

「なあ、それで未練って何なんだよ。かな子さん、そいつらに恨み
があるの」

切り替えの速さに恐れ入る。巧は苦笑した。ポテトチップスの袋
を破き、ばりばりと口へ押し込む山崎は、とりあえず怒ってはいる
ようだ。巧もポテトチップスのおこぼれに預かりつつ、首を傾けた。

「そこがなあ、ようわからん」

「わからない？」

「神社での告白は、いじめの記憶に繋がるわけやん。だから思い出
したないもんにカテゴライズされとつてもしやあない気がするねん。
でもそれやつたら……祭り行きたい言わへん思わん？」

「かな子さんは、その『若様』？ が、好きだったわけでしょ。な
らあの神社は、大切な場所に違いないんじゃないの。行きたいって
思うでしょ」

「だから、大切な場所と、暗い記憶が関連しとるんやっつーの」

「だーかーらー！ その暗い記憶が未練に関係してねーとは言えね
ーだろ。むしろ未練なんてドロドロしたものって決まってるじゃん
。正論に巧は言葉に詰まった。だが、かな子さんは怨霊ではないは
ずだ。ずっと、一人で苦しんでいた彼女は、些細なことを喜べるや
さしい人だった。そんな暗いことを望んで、天国に逝けずにいるの
は悲しい。」

頭を探ると、かな子さんが、一人きりでひざを抱えてうずくまっ
ているイメージが浮かぶ。怨念が彼女の内を巣食っているだなんて、

疑いたくないのが巧の本音だ。

すると、隣でポテトチップスを食べきった山崎が面白くなさそうに呟いた。

「大体、かな子さんが『女子トイレの花子さん』してたのも、訳わかんないままなんだよな」

その通りだ。巧はぽかん、と口をあけて、まじまじと山崎を見やっただ。どうして考え付かなかったのか。袋から何個目かの菓子パンを取り出す山崎の背中を、思い切り叩いた。

「それや！」

06 引きずられんな

「いつてえな！ 何だよ、いきなり」

パンを落としかけた山崎が、背中を押さえて巧を睨む。巧は取り合わなかった。とつと自分の自転車にまたがった。

「行くで山崎、学校や。何で忘れてたんやろ。最初に俺、かな子さんに聞いたやん、なんで学校おるんかって」

えええ、と山崎がうんざりしたようすで言った。まだパン食っていない。まだ座っていたい。夜の学校行きたくない。そんな主張がミックスしたうんざり、だ。

「学校なんて、かな子さんは何十年もいたじゃん。今更何があったか調べたって意味なくねえ？」

「じゃあなんでかな子さんは、女子トイレにこだわったんや。なんで　　そうや、なんで、『時間がない』なんて言ったんや？」

言いながら気づいた疑問も巧は付け足した。山崎がパンをレジ袋に戻しながら呆れた。

「はあ？ 学校が壊されるからに決まってるだろ。女子トイレなくなっちゃうじゃん」

「だからお前、トイレとかな子さん無関係やってええ加減気づけ」
巧は盛大にため息をあふれさせた。

肝試し以外に夜の学校ってどうなん……。

締め切った裏門の外から校舎を見上げて、巧はうなった。昼間はあんなにも人が多くて光がいっぱいにあふれているくせに、どうし

てこんなにゾツとするのだろう。窓と窓は陰になれば真っ黒でなにも映さない。薄茶の校舎は、しみの部分をいつそう際立たせて少年二人を威嚇した。

暗がりの中で、街頭の明かりが白々と彼らを浮かび上がらせる。

夜の幽霊屋敷の次は、夜の学校。ホラーツアー状態だ。しかも今度は玄関口で回れ右なんてしない。忍び込まねばならない。

「うは、不気味〜」

そんな能天気な声を発しているのは山崎だ。巧は音を立てて裏門をよじ登った。表から堂々とも構わなかったが、人目につくと説教を食らいそうなので裏からだ。こちらのほうが、目的地にも近い。おっかなびっくりしつ、闇色に染まっている校内を巧は先頭を切つて校内を走った。脅えていると山崎に取られるのは癪だったからだ。

こんなことする予定、違う（ちゃう）かったのに。なんて後悔しても手遅れだ。いつの間にか、かな子さんを他人事だと片付けられなくなっていた。あんな過去を見せられたら、放つとけへんやろ。そう胸中で繰り返しながら、彼女に肩入れしている事実を苦く思う。自分を脅した幽霊なのに。

「学校壊されると、何で困るんやっちゆう話の続きやけど。校舎自体になんかあるて、俺は思わんねんな。だつてかな子さん、この生徒ちゃうやろ？」

もしかしたら、かな子さんは校舎が建てられる以前から、ここに縛られていたのかもしれないのだから。山崎も、同意した。

「だつてかな子さん、着物姿だもんねえ」

巧が驚いて山崎を振り返る。

「お前、かな子さん、見えとるんか！」

「はあ？ 最初に言つたる。今頃ー？」

山崎の呆れた眼差しが突き刺さる。だつて俺は見えへんのや、と巧がぶつくさ呟くと、「ああ、そっか」と奴は納得した。にやりとして「知りたい？ 知りたい？」と意地の悪い質問をしてくる。別

に！ と返す巧へ、にやにやと笑うのだ。

「またまたあ、我慢しなくっていいのにい。かな子さんはね、小さくて可愛い感じの人だよ。大人しそうで」

巧はかな子さんの過去を知ることができるが、彼女自身の顔を見たことがない。当然だ。自分の姿を知るには鏡等がなければならぬ。声や、視界から判別できる格好ならわかるが……。

巧の関心を引くことに成功した山崎は、にやにや笑いのまま、教えてくれた。

「一重の着物を着てるんだ。茶系の地味な着物。腰にエプロンしてんの。地味な着物だったけど、フリルついたエプロンが可愛かった。かな子さんって髪長いんだ。背中辺りまである真っ黒な髪で、普段はまとめてる。真っ直ぐなんだよ」

そこまで話して、山崎は不意に口を噤んだ。追ってくる気配が消えて巧が振り返ると、山崎は顔を伏せていた。前髪で表情が読み取れない。

「あのさ……巧が言うような怪我は、してなかったんだよ。殴られたあざもなかった。だから俺は……、何も訊かずに、能天気いられたんだ」

そうか、と巧が呟いた。

かな子さん自身が長い時間のなかで忘れていたのだ。山崎が感づけないのも仕方のないことだ。巧自身、過去を知った現在であっても、信じられずにいるのだから。

二人がやってきたのは、旧校舎の裏手である。木々のざわめきに恐怖しないよう、巧は己を叱咤した。ここは昼間来たばかりだ。何を恐れる必要がある。

「巧い、何やってんだよ、こっちじゃないのか」

女子トイレの戸を開こうとしていた山崎が、怪訝そうにしている。巧は眉根を寄せながら、じっと校舎裏を凝視していたのだ。

「夕方ここ出るとき、妙にこの辺り気になったんや。あん時はあんま気にせんかったけど……ここ振り返ったんは、かな子さんちゃう

「かつたんかなーって」

「雨止んでよかつたなーって外見てたんじゃなかったんだ？」

「否定せえへん。でも、やっぱ気になるわ、ここ」

ざわりざわりと、湿気を帯びた風に梢は揺れた。水の流れる音が聞こえる。胸騒ぎがした。ここに何かがあると告げている。だが、何がある。ここでどうすればいい。

旧校舎の裏は、街灯の明かりも届かない。暗がりばかりが漂っている。だが校舎にライトをつけると、遠目でも一発で侵入がバレてしまう。見つけて下さいと言わんばかりだ。しかし月明かり、星明りで何かを探索するには無理があった。しばし悩んで、巧が騒ぎになるのを覚悟したときだ。パツと細い光が視界の片隅で瞬いた。ペンライトだ。おおお、と目を丸くすると、山崎が「露店で買った」と歯を見せた。

光を調節すると木々に光のスポットが出現した。こういう細かいところに気がつくのが、山崎だ。

「でも、俺らだけじゃここで何を探すのかわかんねえよ。まだかな子さん、出てこれねえの」

「さつきが凶悪過ぎたからなあ……」

先ほどのアレは、かな子さんが忘れたかった過去に違いない。

数度巧が呼びかけても無反応だった。声が届いている確信はあったので、かな子さん、と根気良く呼びかける。

「かな子さん、津路崎からはもう離れた。学校戻ってきたんや。ほら、あそこがずっとかな子さんのおった女子トイレや。なあ、あんたが来たかった本当の場所は、ここちゃうんか。かな子さん、なあ、返事してくれへん？俺らここで何したらええんや。わからへんねんって」

どうだ、と山崎が目で問いかけてくる。巧が軽く頭を左右に振りかけたときだ。巧ちゃん、と応えがあった。囁きにも似た小さな声で。

巧は反応があったことを山崎に合図する。山崎がばあ、と表情を

明るくさせた。だが、かな子さんは予想とは違つ、暗澹とした反応をしたのだつた。

『巧ちゃん、もう、いいです。もう、そんなことしなくてもいい……です』

暗い声だつた。元気いっぱいなのにこにこ笑つ、ハイテンションなあの声ではない。覇気のない低いそれは、覗いた過去で見た通りの傷ついた者の声だつた。

かな子さん？ と呟いた巧のようすから不安を嗅ぎ取つたのだらう。山崎が怪訝そうにした。おい、今度はどうしたんだよ、と言つ山崎を視野に入れながら、巧はかな子さんの声に耳をすませた。

『いろいろと、思い出せました。巧ちゃんたちが私を連れ出して、くれたから……』

虚ろに巧の内側を叩くかな子さんの存在が、酷く弱々しい。その軽さに、巧は歯を食いしばる。こんなに、この人は、小さかつただらうか。これほど、脆かつただらうか。

そしてかな子さんは吐き出した。

重たい言葉を。

『巧ちゃん……。私は……。自殺したんです。ここで』

木の幹に巧が拳をぶつけた。それだけでは気がおさまらず、さらに殴りつけ、蹴りつけた。木がみしみしと悲鳴を上げる。深く根を広げた木は、折れることなく暴拳を受け止めた。わさわさと揺れて、抗議のように木の葉を舞い散らせた。

「ちょ、巧、どうしたんだよ。かな子さん、何言つたんだ、なあ、何暴れてんだよ」

「うるさい、黙れや！」

止めに入ってきた山崎を、巧は腕を振り払うことで殴つた。ひじが山崎の横面にヒットしたのだ。巧より小柄な山崎の身体が転がる。

それが、かな子さんの過去と重なった。あ、と巧は自分の仕出かしたことに凍りつく。自分が軽蔑したものと同じ存在になり下がった気がした。しかし巧が完全フリーズする前に、奴はぴよこんと飛び起きた。「いいてえ！」と声をあげながら。

「やまざき……？」

巧が思わず呟くと、ぎつと眼を吊り上げて詰め寄ってくる。巧は勢いよく襟元を掴まれた。

「いてえじゃねえかよ！ いきなり何してくれてんだ！ あ？ 言つとくけど、俺はお前みたくかな子さんに憑かれてねえんだよ。説明なきやわかんねえんだよ。一人で切れんな、暴れんな！」

眼前まで顔を寄せてすごまれ、「わ……悪い」と巧の口から謝罪がぼろりと落ちた。山崎の反応は、普段は機嫌のよいネコがしゃー！ と毛を逆立てたようだった。ごろごろと喉を鳴らして女子から可愛がられているイメージが強かったので、この反撃には巧も驚きだ。

よし、と鼻息荒く山崎がうなずく。そして殴られた頬を押さえた。「だあもう、いいてえ……。思いつきり当たったな、くそ。肘かよ、肘。あーあ、これ痣になるかな。明日目え覚めたら腫れてたりしてな」

言葉に含まれた棘が、巧に突き刺さる。悪気はなかった分、棘は切れ味鋭く良心にドスドスと。

「で、何言われたか言ってみるよ、あ？」

山崎が獰猛な笑みを見せる。顔を殴っただけの理由があるんだろうな、こら。言葉には変換されていない怒りのオーラが立ち上っている。一気に柄悪くなってへんか？ たじろぎつつ、巧は観念する。脳裏にかな子さんの姿を描きながら、ぐしゃぐしゃと前髪をかき混ぜて、吐くように、言った。言葉が刃になって、二人を傷つけやしないかと、恐れるように。

「かな子さん、自殺……自殺したんやって……。裏の、川に飛び込んで……」

学校裏の八多観川は、流れの激しい川だ。さほど幅はないが、ところどころ急に水深三メートルを越える深さになる。特に学校近くでは鋭いカーブを描いていて、底が深くえぐれていた。巧たちのいる場所から数メートル先のフェンスを越えると、急な崖になっていた。そこにかな子さんは身投げしたのだ。浮き上がらないように足に錘をつけて。

強制的な結婚が嫌で。

死を選ぶことでしか、自分の我を貫けないと悟って。

ひとりぼっちで川の底に沈んでいったのだ。

「それで？ どうしたんだよ」

山崎が仏頂面で先を促す。巧は数度瞬いた。クラスメイトも同じように憤ると思込んでいたのだ。

「それでって……それだけやけど」

はああ、と山崎はこれでもか、と重いため息をついた。先ほどの巧に対するあてつけか。半眼になって、人差し指を突きつける。

「あのさあ、かな子さんって地縛霊なんだから。真つ当な死に方してはならないじゃん。言ったら、最初に。十八歳の可憐な乙女だったさあ？ 未練抱えたって仕方ないだろう。そんなことは、大前提なんだよ」

「でも、かな子さんは忘れてたんや」

忘れていたから、出会った当初は無邪気に笑っていたのだ。かな子さんは、忘れたかったのではないのか。過去の闇全て、沈めてしまいたかったのではないか。それをわざわざ掻き混ぜて、無用に苦しめただけではないのか

「巧、引きずられんな」

鋭い警告が飛んでくる。

「お前はかな子さんじゃない。不安定になんなよ。とりあえず、何か食って落ち着け」

飛んできた菓子パンの片割れを受け取り、巧は情けない面持ちになる。オーソドックスなクリームパンでも甘いものは苦手だ。コー

ヒーがセツトなら平気だが……。天敵のように見据えていたが、山崎の「食え」という威圧感に耐えられずかぶりつく。吐きそうになったが、無理やり嚙下した。持ってきたペットボトルのお茶で流し込む。

「そうだ巧、かな子さんに代わってくれね？　かな子さん、話しよ
うよ」

もぐもぐクリームパンを美味そうに頬張る山崎は、にこりといつも通りの笑みを浮かべていた。その変わり身の早さに戦きつつ、巧は顔をしかめ、提案に否を出した。

「嫌や言つてんで。っーか、聞こえとるみたいや。俺通つて」

「俺は、巧じゃなくて、かな子さんとしゃべりたいわけ。なあかな子さん、ほら、出てきてよ」

07 もつと暗い原因連想しちゃったんだよね

据わった目でずっと顔を寄せられると強く出られなかった。わざとではなかったが頬を思い切り肘が強襲したばかりなので。だが、かな子さんは頑なに表へ出ようとしなかった。表面に出ることを厭っているようだ。

「うち、と山崎は舌打ちした。普段の愛想良さからは想像できないブラックつぶりだ。もしかしてこっちが本性なのか、と疑ってしまふ。ちくちくと所在ない巧を視線で刺し、それでも結論を覆せないと判断すると、嫌々山崎が口を開いた。

「かな子さんって何がたくて自殺したのかなって思ったんだよ」「巧は眉間にしわを寄せた。そんなん決まっとるやる。

「意に沿わぬ結婚が嫌やつたんや」「それが一つ」

ひとつ？ と巧が眉根を寄せると、山崎はあごを引いた。

「うん。それだけにしては、いろいろ繋がる気しない？ 俺、未練が何かはよくわかんないけど、自殺を選んだ動機？ ってのは、心当たりが他にも浮かぶ」

それに、昔は当人の感情など無視して、親の都合で相手が決まることも多かったはずだ。かな子さんも承知していたのではないかと山崎は言うのだ。自殺に至った要因が一つとは限らない、と。

「好きな人と結ばれへんかった。将来に悲観した、とか？」「そうそう。孤独に耐えられなかったとか」

巧は地面へと視線を転じた。かな子さんは一人ぼっちであることに耐えられなかったのか。身体も、心も、ぼろぼろになっていた事実を思い出す。まさにどん底という言葉が相応しかった。あの状況でも、支えてくれる誰か一人でもいたら、結末は違っていたのだろうか。

「そつやな……」

巧は一人でいることが苦痛ではない。他人を煩わしく思い、自分から距離を置いてきた。その原因は巧が少数派であるためだ。方言は奇妙なほど、周囲から浮いて聞こえる。わずかな調子の違いが、亀裂を生むのだ。その違和感は、思っていた以上に深く根を下ろしている。

今のところ誰とも衝突していないが、何がきっかけで周囲から敬遠されるかわからない。その要素は十分に承知していた。いや、敬遠だけで済むなら楽なほうだ。暴力にまで発展し、肉体と精神どちらも苦痛を味合わされ続ける可能性も他人より高いのだ。その場合、一人きりでいるのは辛すぎる。

まあ、高校までできて、いじめはないやろうけど。

樂觀できない立場にいる身としては、かな子さんへの同情も増すものだ。

拳句、身内誰もおらんくなったら、どうなつとるんやろう。それでも生きてようって思えるんやるか。立ち向かえるんやるか。あんな惨い仕打ちに耐えられるんか。目をつむると、簡単に地を這うかな子さんが映る。状況が違っても同じ目にあつたとき、死を選ばないと言い切れるか。

何となく巧が沈思していると、山崎がぷつと吹き出した。苦笑している。

「巧って考えてること顔に出んのな。かな子さんが選んだの、わかってきたなあ」

は？ と巧が頭にはてなマークを浮かべる。山崎は薄く笑んでいた。

「俺はさ、もっと暗い原因連想しちゃったんだよね。自殺って他人への当てこすりとか、抗議、自己満足って部分も多いじゃん」

ざああ、と木々が揺れた。川の流れる音がやけに大きく聞こえる。それらに混じって祭り拍子も聞こえてきた中で、一瞬、空気が冷えた。巧は、自分の思い至った可能性に、息を詰める。喉が上下した。手のひらにかいた汗をシャツにこすりつけながら、山崎を見据える。

「まさか、津路崎への復讐……？ いや、でも」

あのかな子さんに限って？ 否定を望んで見つめた山崎は、至極真面目に言った。

「それもあるんじゃない？」

巧の顔が険しくなる。

「俺はさあ、津路崎っていうより、その若様に対する復讐でもあった気がするんだ。そうじゃないの、かな子さん」

巧は自分の顔が微笑んでいる事実を、知りたくなかった。

口が、勝手に動く。

「正解ですよ」

「何 言うてんねや、かな子さん！ 山崎も、なんつーこと言うんや！ 意味わかって言うとなのか！？」

巧が血相を変えた。だが、その次には冷静な顔に戻っている。かな子さんが、出てきているのだ。先ほどまで嫌がっていた山崎と話をするために。

「陽ちゃんの言ったとおりですよ。私は死ぬことで意思を通し、復讐を果たしたんです。津路崎へ泥を塗ることも成功しました。奥方はさぞ慌てられたでしょうね。まさか私が、懇意にしていただいているお貴族様の目に留まるなどと。婚姻をこんな形で破る羽目になるなどと。 巧ちゃん。私はあなたが思うほど、人間ができていません。先ほど、津路崎の荒れたお屋敷を見て私は思ったんです。……ざまあみろって」

巧は、傷ついた暗い笑みを浮かべる自分の顔を両手で挟んだ。そんな笑みをして欲しくなかった。これが、かな子さんの本心ではないと、わかっていたからだ。

「違う（ちゃう）やろ、かな子さん。十年以上過ごしたあそこを、本当にあんたが恨んでたとは思わん。だってあそこで、あんたは出

会ったんや、好きな人に」

「引き裂いたのもあの家ですよ。私が死のうと決めたのも」

「ちゃうやる！ 引き裂いたんは家やない。身分なんて、くだらんもんや。あの時代のせいや。今やったら……いや、今でも……差はあるんかもしれへんけど……。あそこまで露骨やない。すべてを恨んで妬むには、幸福な時間もあつたはずなんやから。」

「そう訴えるはずが、できなかつた。ずきん、ずきん、と頭痛がぶり返してきたせいだ。辛さを紛らわすために巧が額を押さえる。そのうち視界がぶれた。周囲がぐつと暗くなって、過去が重なつたのだと気づいた。現在と違うのは、木々のようすと、落下防止用のフエンスがないことと 背後に校舎がないことだ。そして街に明かりが少ない。月が煌々と闇夜に浮かんでいるのが、枝葉の隙間からわかつた。」

「視界の主であるかな子さんが、土を掘り返していた。木立に潜んで、穴を掘っていた。指先が黒く汚れても、手を止めなかつた。鋤や鍬があれば単純に掘ることのできる地面を、木切れで必死に。」

「息切れしながらある程度の穴ができると、改めて周辺に誰もいないことを確認し、耳をすませた。汗を手ぬぐいで拭きながら歩くと、遠くに明かりが浮かんでいた。闇が濃い時代に、そこだけぽつんと明るい。あれは津路崎の屋敷だ。かな子さんは、夜中にそつと抜け出して来たのか。」

「持ってきた風呂敷包みをそつと開けると、小さな箱が出てくる。」

「おもちゃみたいな箱だつた。もしかしたら飴や洋菓子が入っていたのかも知れない。カラフルでかわいらしい箱。」

「さん……、さん……っ」

「箱を抱きしめて誰かの名前を繰り返す。涙声のせいで、よく聞き取れない。肩が小刻みに震えた。『若様』を呼んでいるのだと、巧にはわかつた。視界がぐにやりと歪んだのは涙のせいだ。どんどん溢れて、ぼたぼたと箱や手の甲に落ちていく。ごめんなさい。ごめんなさい。名前を呼びながら、謝り続けている。」

先ほどの場所まで戻ってくると、穴の底に、箱をそつと置いた。片手で涙を拭いながら、掘り返した土を丁寧に戻していく。ごめんなさい。許してください。ごめんなさい

『……巧ちゃん？』

頭の中でかな子さんがこちらを窺う気配がした。数度巧は瞬いた。木々の奥にはフェンスがある。振り返ると旧校舎がある。

「くそ、またか」

どうやらまた過去にトリップしていたようだ。山崎がまだ気づいてないということは、ほんの一瞬だったのか。くそ。などと悪態をついても、自分ではコントロールできないのだから、仕方がない。

どうやらかな子さんの感情の揺れで、この再生は始まるらしい。かな子さんが故意に見せていない辺りも性質が悪かった。覗き見しているようで後ろめたくなる。ましてやさっきのアレは、確実に人目を避けていた。かな子さんの秘密だった。

「ごめんなさいってどういう意味や。」

かな子さんは泣きながら何を埋めていた。箱……そうだ、小さな箱だ。そう思いながらも、巧は今『視てきた』内容を脇へやった。

「かな子さんは、『若様』まで恨んどんのか」

激しい頭痛に見舞われ、巧は歯を食いしばる。かな子さんが揺れている。動揺しないよう慎重になっているようでも、巧にはわかる。しばしの時間を要してから、かな子さんは表向きには冷静な返事をくれた。

「そつとしておいて欲しかったのです。私はこの気持ちだけで、良かった」

ささやかな幸せに、満ち足りていた。

過去のかな子さんも、同じことを言っていた。目が合った一瞬、言葉を交わす一瞬……そんなものだけで幸せだったと。あの人が幸せであれば、自分も幸せだと。

かな子さんは、見るばかりの恋をしていた。触れることさえ許されない恋を。

「あの方とのことは、それ以上を望みません。結ばれるなどと、おこがましいことは」

「だけどあの男は、望んでたやる。かな子さんが言えんかったこと、あいつは言うたんやで。なんでかな子さん　ぬあ!？」

背中に突如重みがかかった。座っていた巧の背中に、山崎が乗りかかっている。

「巧い、一人芝居がすげーことになってるから、熱さましてくれりー?」

それは、言わないお約束である。

「俺がて好きでこんなんするか!」

重いい、と巧は訴えたが、さらに上半身へかかる体重は増えた。

「ほらまた熱くなるー。腹減ったなら、さっきコンビニで買ってきた奴あるだろ。もう全部食ったの?　普段の巧と違い過ぎて笑えるけど、だんだん洒落になんねえっつーか」

巧の沸騰した頭が最後の一言で静まってい。確かにそうだ。普段は情緒不安定ではない。大声もそう出さない。巧は自身を冷めた人間だと思っていた。しかし、今日一日でどれだけ怒鳴ったことか。これほどの激情が身の内に存在していた事実には驚かされる。

「かな子さんの影響受けすぎてんの?」

山崎の苦笑が、困惑を伝えてくる。そうなんやるか。影響……それとんのか……?

山崎はレジ袋から取り出したスポーツ飲料を、下敷きになっている巧へ渡した。あまり残ってないので全部飲んで良いということか。

「巧は怒ってるけど、俺は、何となくわかるんだよな」

「なにが」

「かな子さんさあ、今でも好きなんだ『若様』が。だから死んだんだ。その男がかな子さんを、覚えていてくれるように。大切な人。自分のせいで失ったって後悔してくれるように」

淡々と山崎は言った。

丈夫な身体ではないのに、無理を押しして戦争へ行ってしまった男

が、後悔してくれたらいい、と。男にとってそれだけ深い存在であつたらいいと願ひながら。そうすれば、ずっと覚えていてくれるだろう、と。

男が戦争など行かなければ。かな子さんを好いたりしなければ。かな子さんを望めるほど強い意志があれば。

自分の母親を強く説得してくれさえすれば。

あんな目にあわずにすんだ。

自分で自分を殺さずにすんだ。

そこに芽生えた悪意の欠片が、復讐という闇を招いた。

「しかもさ、これは『若様』が無事に帰ってきたらっていう仮定付きの呪縛だよ。巧はかな子さんの我がままを……願ひを、まだ責める？」

戦争に行った男が自分の元へ戻ってきてくれると信じて。

いや、と巧が小さく否定した。もともと、責めるつもりはなかったのだ。ただ、嘆きを殺して冷淡に見せようとする彼女が、悲しかった。自分を偽る彼女が。

巧の腕が、意に反してするりと動いた。自分の胸をぼんぼん、と手のひらで叩く。スローテンポのリズムで、巧を肯定するように。

「巧ちゃんは、いい子ですね。やさしい、いい子ですね」

やわらかな肯定だった。これを真実求めていたのは、彼女のほうなのに。

「陽ちゃんも、私の代わりに言ってくれてありがとう」

山崎がにこ、と笑みをつくった。当然でしょ？ とでも言うように。

「それで、ここに何があるのか、教えてくれるの」

かな子さんが目を伏せた。憂いに沈んでいくのが巧にはわかった。脳裏に、先ほどのイメージが蘇る。男の名前を呼びながら、ずっと謝っていたかな子さんが。

「私の、想いです……」

回答を躊躇うかな子さんは、ぼつりとこぼした。しばしの時間を

要して。

あれこそが未練だったのか。

「ここには、私の宝物を埋めました」

たからもの、と少年二人は同時に呟いた。

「と言っても、私にとっての、です。触れてはいけない宝物なんです」

かな子さんにしか価値のない宝物が、ここに埋めてある。何十年も触れずに、半端な距離で守ってきた宝物が。

「どうして埋めちゃったの。大切なものだったんでしょ？」

くすり、とかな子さんが微笑んだ。

「はい。大切なものなんです。誰にも触って欲しくなくて、この宝物の傍にいたくて、ずっと私はここにいたんです……。中途半端ですよね。死んじゃってるから、宝物に触れることなんてできないのに。そしたら運悪く校舎が建てられてしまっ、私の居場所は女子トイレになっちゃったみたいですけどお」

あはは、と笑い声を立てる。もう、嫌ですよねえ？ と話を振ったかな子さんは、山崎がぱんぱん、とジーンズを払って立ち上がるのを見た。

「ここどの辺りかわかるの？ かな子さん」

「……探すつもりですか？ 陽ちゃんには、価値のないものですよ」

08 その資格が、ありません

「それがあるから、かな子さんは成仏できないんですよ。一人ぼっちで、泣いてきたんですよ」

山崎は、真剣な眼差しだった。かな子さんが逃げるようにくるりと背を向ける。

「あの、陽ちゃん。私お祭りまだ途中だから、あっち行きたいですよ」

「巧ちゃんもお腹すいてますよねえ、と笑いながらふらふらと歩き出す巧の（かな子さんの）腕を山崎が取った。

「ここどこに埋めたの。今を逃したら、手遅れになってしまうかもしれないから言うんだよ。教えて」

かな子さんが山崎から身を離す。逃げるように、怯えるように。

「かな子さんっ！ もういつ取り壊し工事が始まるかわからない。宝物が壊れちゃうかもしれないんだよ。それでもいいの？」

彼女は目をぎゅっと閉じて唇をかみ締める。肩をすくめ、叱られるのをぐっとこらえる子どものような態度に、山崎がつかんでいた手を放した。かな子さんは、いつも押さえつけられてきた人だ。こうして貝のように周囲と自分を乖離し、嵐が過ぎるのを待ってきたのだ。

山崎は、「あ……」とぼつが悪そうに腕を開放した。責めるつもりはないが、かな子さんが怯えているのはわかったのだろう。

「……印があるはずやねん。や、印とは言わへんかもしれないけどそれまで黙っていた巧が、ぼそりと言った。かな子さんを押しつけ、無理やり出てきたのだ。山崎が、巧い、とホッと息をつく。

「ここどこかにあるはずやわ。たぶん傷が……幹の皮剥がされた木が。その下にな子さんは、宝を埋めたんや」

「おっしや、わかった!」

山崎が手近な木に飛びついた。巧がそれに続こうとすると、スト
ップがかかる。

「いい、それぐらいやるから。ライト一つしかないし、だいぶお疲
れだろー」

山崎が丹念に木々を調べ始めた。ごつごつした木の幹に触れてペ
ンライトをかざすのだ。四方から眺め、上から下まで光を当て、目
印がないかを探していく。うわ、毛虫! 蛾!? うあああ、何か
いる、何か! という悲鳴は、どこか楽しそうに聞こえてきた。

山崎の言葉に甘えた巧は、コンクリートのある校舎付近まで下が
って、腰を下ろした。ふう、と息を吐いてまぶたを閉じると、身体
が自然と傾いていく。胸が大きく上下していた。べたつく汗が、気
持ち悪い。冷たいコンクリートが心地よかった。これで、柔らかく
て寝心地がよければ最高ののに。

寝具があるなら、一瞬で眠りの国に旅立てた自信があった。しか
し、簡単には巧を休ませてくれないらしい。

『どうして……どうして巧ちゃんが、知ってるんですか。陽ちゃん
を止めてくださいっ』

頭の中で、かな子さんが噛み付いてくる。頭痛に響いて、巧は顔
をしかめた。

「視えたんや。泣きながら何かを埋めてるあんたがな」

な、とかな子さんがたじろいだのがわかった。予想外の反応に、
巧ははてなと首をひねる。しばし考えて、

「俺らの会話、聞いてへんかった? かな子さんに憑かれとるから
かな、あんたの記憶が時々俺に流れてくるんや。白昼夢みたいな感
じで、さっきから何度か。なあ、あのとぎごめんなさいって、
だれに謝ってたん?」

かな子さんが警戒を強めている。身体があつたなら、身構えてこ
ちらを凝視してそうだ。

『そう一部分は……、わからなかったのですか?』

巧は、自分の視たものが曖昧でぼやけていることを伝えた。かな子さんの記憶を一部見たつてすべてを把握できるわけではないこと。巧は千切られた断片を元に、推測していること。もし、宝物を探すことがかな子さんのタブーに触れるなら、自分たちが代わりに行うことも、巧は言った。

かな子さんは、そうですか……と静かに応じた。

『探さなくて、いいんですよ……。あれは、もう私には相応しくないものなんです。あなたたちが見つけても、何の価値もない……。』
すると巧は顔をしかめた。「無理や。聞けへん」と即答する。

『どうしてですか。余計なお節介だと言ってるんです！』

「あんたが泣いとるのが、嫌やからや。それだけや。あかんのか」
巧がへの字に口を結んだ。そのままむっつり黙り込む。巧では埒が明かないと悟ったのだろう。かな子さんが強引に表へ出てきた。それを巧は察して意識を潜らせた。この辺りの『交代』も、慣れてきたものだ。気だるい身体が無理に動く。山崎のいるほうへ向かって、

「陽ちゃん、放っておいてください！ 私はアレを持つ資格なんか、ないんです。もういいんです。探さないで！」

何言つてんだよー、という声が暗がりから届いた。山崎は木々を調べる作業をこなしつつ、

「請け負ったんだから、最後までやらせて。これは俺の我俣なんだ」
我俣つて、とかな子さんが絶句する。巧は内に潜みながら、意識だけで笑った。山崎の反応は予想通りだった。

「巧が言ったでしょー？ 傷ついて欲しくないって。今を逃したら絶対後悔するよ。そしたら悪霊にレベルアップしちゃうって。そんなの、嫌なんだ。だから、許してよ」

自分たちのためだ、と二人から言い切られ、かな子さんは沈黙する。説得を諦めて、ひざを抱いた。顔を腕の中にうずめていく。

『二人とも……。どうして、そんなことを言ってくれるのですか。私に手を貸したつて……。いいことなんてないのに。むしろ私は、迷惑

ばかりかけているのに』

「そうや。だからあんたは俺ら納得させてくれなあかん。理由あるんやろ。言つてみいや。あの箱が、何なんか。山崎は、見つけてまうで」

この暗がりです、細いライトを頼りに、かな子さんの宝物を。

「どうするんや、かな子さん。いつまで逃げ続けるつもりや。ええ加減、開放されてええんちゃうか。……気づいとるんやろ？」

ぴくん、と巧の指が動く。

「あんたにはあとどんだけ、時間が残されとるん？」

時間がない、とかな子さんは言っていた。時間がない、と繰り返して。

ずっと校舎が潰されるからだと捉えていた。しかし、気づかざるを得ない。かな子さんが、どんどん消えていく事実を。巧の内側にありながら、刻一刻と消えようとしている彼女を。

ここに囚われている理由、津路崎を恨んでいた理由を忘れていた彼女は、もしかしたら本当に失っていたのかもしれない。巧たちが引つ掻き回さなければ、自分が誰であったのかさえ思い出せないまま。

あと、どれだけ、時間が。

「巧！ こっち来て」

のろのろと巧が重い腰をあげると、山崎が「たくみ！」とライトをぶんぶん振り回す。木々の間を光が四方八方に切り裂いて、思わず巧は手をかざした。こっち照らすな、と悪態をつく。

「見つけたんか」

「たぶんね」

どう、と山崎が一本の木を照らし出した。確かに生皮を剥がれた幹が、上部にある。予想より上のほうにあった。ああ、あれだ。す

ぐにわかった。かな子さんの記憶では、自分の胸か腰辺りだったはずなのに。それだけ長い時間が過ぎたのだと思うと、複雑な気分になる。

「でもさ、ちよーっとこれじゃ掘れねえよな」

ざっざっ、と山崎が地面をつま先で蹴った。しゃがんで手で触れた巧も顔をしかめた。かたい。やはりシャベルがないと、掘り返せない。

「と思つて」

巧は後ろ手に隠し持っていたシャベルを取り出した。山崎が木を探している間に、用務員室から借用したものだ。用意いいじゃん、と山崎が笑って一本を受け取った。もう一本で巧も土を掘り返す。固い土を掘り返すには、予想外に力が必要だった。かな子さんの記憶では、さほど苦労はしなかったのに。

「なあ、大切なもん見つけないのに、資格っているもん？」

「いらないよ、と山崎が答える。」

「大切だつてわかる奴に資格があるんだ。価値のわかない奴が探したつて意味ないよ」

「やな、と巧も頷いた。きつとこの宝物は、再びかな子さんの手に戻ることを願っていた。そのため埋められたのだ。長い時間をかけて、ずいぶん遠回りしてしまつたけど。」

「だからさ、かな子さん。俺らじゃなくて、かな子さんがちゃんと受け止めなきゃ、ならないんだからね。辛いことも一緒だつたけど、それ全部ひつくるめて、大切なんだから」

「お前、ええこと言うなあ」

「たまーにね」

かな子さんが、巧の中で拒絶している。それを抑えて作業をこなすものだから、巧はやがてシャベルにもたれかかった。汗が滝のように流れ落ちた。目に入って痛い。少ししか動いてないのに、消耗が激しすぎる。

「いいよ、俺が掘る」

平然と山崎が言った。すまん、とへたつて巧は力を抜いた。ああ、もう寝てしまいたい。疲労がピークを超えている。節々が悲鳴をあげるようだ。持ってきていたペットボトルの中身は、すでに空だった。食料も底をついている。だが、腹が減っているとかなんかもの以上に、眠くて仕方がない。ががつと土を掘る音と、川のせせらぎと、梢の音と、虫の音と。少し蒸し暑いが、このまま眠ってしまえそうだ。

そのとき、山崎が「ん？」と訝しげになった。巧は瞼を押し上げる。

「巧、ちよつと見て。何かに当たった」

ペンライトをかざして、山崎がしゃがんでいる。重い身体を引きずるように前進した巧は、内側からの叫びに頭を押さえた。その目から、涙がぼたぼたと零れ落ちる。か細いライトの光が、箱のような何かを浮かび上がらせたのが、引き金となったのか。巧？ と山崎がこちらを見る。

「何もな……かな子さんが、泣いて……その箱」

それだけで伝わったのか。うん、と山崎が慎重に土を掘り返していく。箱を傷つけないよう周囲から掘り返し、土をかき出した。指先が真っ黒になって、汗ばんだ肌にTシャツが張りつく。結構な深さを掘って、それは姿を現した。

「これだよな」

嬉々として箱を取り出した山崎が、巧へ強引に押し付けた。目をそらして首を振っていた巧は、箱の感触に身体が凍りついた。

「すけさん」

そんな呟きとともに、優しい記憶がいつせいに押し寄せてくる。気がつけば胸元にかき抱いて、くずおれていた。嗚咽が、止まらない。涙が後から後から押し寄せてくる。

「遠くから見つめるだけで、よかつたんです。そんな私が、あの人とお話をできた。あまつさえ、私を好きだとあの人は言ってくれたんです。だけど、私は……」

小さな幸せ以上を決して望んではいけなかった。二人一緒の未来を夢に描くことさえ、許されなかった。

あふれる感情に翻弄されながら、巧は、今こそ唇を笑みの形に変えた。ほら、あんたがずっと、触れたかったもんは、これや。俺の身体、貸したるから。

「かな子さん、開けてみなよ。宝物、確認してあげなよ」

巧が かなさんが 怯える眼差しで仰げば、山崎は「ね？」と微笑んだ。改めて見つめる箱は、手のひらサイズのブリキの箱だった。元は飴か何かが入っていたのかもしれない。おもちゃのような鮮やかな色の箱だったはずなのに、現実に抱きしめたそれは赤茶けてさび付いていた。

ふたを開けようとすると、嫌な音が鼓膜を揺らした。手のひらにボロボロと錆がつく。何十年分、ぎっしりここに詰まっているのだろう。半ば壊れるようにして開いた箱の中には、さらに小さな巾着が入っていた。あでやかな布地は、着物の端切れだろうか。元は赤い模様の巾着だったのに、虫に食われて穴が開き、茶色く汚れていた。その中にはさらに折りたたまれた封筒が入っていた。

「かな子さん宛の手紙……？」

山崎が不思議そうな顔をする。両手で口元を押さえるかな子さんに代わって、山崎がペンライトで照らしながら封筒をつまんだ。

封筒に書かれた宛名は滲んで読み取りにくい、かな子さん宛てのものだろう。裏返して確認した差出人の名前は、『津路崎 陽介』とあって、山崎が弾かれたように顔を上げた。封は切られていない。「これって」

乾いた声で尋ねる山崎に、かな子さんはうつむきながら首を左右に振る。

「かな子さんこれ、『若様』じゃないの。ねえ、どうして手紙読んでないの？ かな子さんっ」

「読めません」

「どうして」

「そこに何が書いてあっても、私たちは一緒の未来を、歩けません。読む前から、私はあの人の想いを裏切っているんです。その資格がありません……」

そうだ。かな子さんは、待つことさえ許されなかった。それを今なお悔んでいるのだ。だから、かな子さんは想いを過去形では話さない。

しゃがんだ山崎が『かな子』さんを覗き込んだ。

09 あんた、逃げたんやな

「でもね、この価値をわかっているのはかな子さんだけだよ。この人の想いを受け止められるのも。何年……何十年もこの手紙はかな子さんを待ってたんだろっね」

待ってた、とかな子さんが呟いた。怪訝そうに。

「うん。きつとかな子さんが、許してくれるのを」

「そんな、許すだなんて、私が」

かな子さんにしてみたら、予想外だったのか。驚愕を隠し切れずにいる。山崎は手元の手紙を眺めながら、

「かな子さんが好きな人ってさ、身体が丈夫じゃないみたいだったって巧に聞いたんだけど」

「ああ、なんやひよろつとした感じやったわ。兵隊ならうって志願するタイプちゃうで。実際、身体丈夫ちゃうて、心配されとったしな」

『そんなの、関係あるのですか？』

巧の内側で、かな子さんが疑っている。

「関係あるんちゃう？ ああ、山崎、かな子さんが関係あんのかってさ」

「あるよね。かな子さん、『若様』って大事にされてたんじゃない？ 丈夫じゃないっていうのはいつから？ もしかして、生まれつき？ でも兵隊に志願するぐらいなら、そのころには治ってたのかな」

それは、とかな子さんが口ごもる。

「これは想像でしかないけど。『若様』が小さいころから身体が弱かったなら 重かったんじゃないかな」

「重い？」

「うん。後ろめたさや、負い目……とか」

かな子さんは沈黙している。記憶を探っているのだろうか。思い出せるだろうか。

巧は想像するしかない。大事な家の跡継ぎだったなら、病を治療するために過剰な看護を受けてきたのではないかと。ましてやあのおっかない母親だ。何をするにしても、干渉を受けたのではないかと外で遊ぶことから、付き合う友人、話し相手、学業、居場所……そして許婚^{いいなまけ}、自分の将来。きつと、自分の意志を通せない。

「自分が何かする前に周囲が勝手に動いてくれることってさ、ある意味信頼がないってことと一緒なんだよね。何もできないんだから、言う通りに動きなさい。って、レール敷かれてるときさ。そういうのって、息苦しいんだよ。自分を思ってくれてのことでも、お前は普通と違うんだってレッテル押し付けられてんだから」

同じことを山崎は想像していたようだ。重たいのは、過剰な愛情。それは、かな子さんが陥った不幸とは別の不幸だ。柔らかな棘に包まれた檻と同じ。ただ生かされているだけの苦痛。

「身体が丈夫じゃないってだけで、人は距離を置くよね。遠慮って形だけど、避けられることに変わりはない。『若様』にはさらに、身分つてものもあったんだ。……それで誰かを好きになるって、すごく勇気がいったんじゃないかな」

身分違いの恋であり、想いを伝えることの意味がわからないはずはない。まず身内が反対するに決まっている。『若様』は、ここまですべてしてくれたと言う負い目がある。かな子さんが苦しんだように、彼もまた苦しんでいたのではないか。

一番最初、かな子さんの過去に触れたとき出てきた男を、巧は思い返していた。彼はかな子さんが現れたことを心から喜んでいようだった。ホツと安堵していた気さえする。口調も丁寧で、何やら思いつめたような雰囲気をしていた。もしかしたら、自分は否定されると予測していたのかもしれない。

それは、かな子さんの都合とは別の意味で。

「実感こもつとるやん」

「小さいころ喘息持ちだったからねえ、覚えがあるわけ。いろいろと」

好き勝手推測している俺たちの話を聞いていたのだろう。かな子さんがそろりと動く気配がする。巧はすつと内側へ潜った。

「それで、陽ちゃんの言う、私に許して欲しいって言うのは……」

「推測だよ。俺たちが話してたこと、概ね当たってたって思っているの」

どくん、と心臓がはねた。どくん、どくん、と主張する。かな子さんが緊張している。自分の持つ箱を見下ろして、唇を噛み締めた。ややあつて、

「……確かに、あの方はお一人でいらっしやるのが、多かったです。奥の離れで、ひっそりと暮らしておいででしたから。私たちはそこへ、近づかないよう言われてました。お食事も、奥方様自らお運びになられてたほどです」

そういえば、津路崎の屋敷の裏手は竹林がある。そこから山すそへと竹林は広がっていた。あの中のどこかに離れがあったのかもしれない。

「かな子さんは、どうして知り合っただの」

「洗濯物が……飛ばされて、迷い込んでしまったのです。十の歳でした。そこにどなたがいらっしやるかも知らずに」

ふと、イメージが浮かんだ。竹林の細い小道。ひっそりと佇む小さな家屋。低い垣根。色白で痩せぎすの少年が、洗濯物を拾ったところ。竹林の隙間に落ちてくる光。ありがとう、と話しかけたかな子さんと、戸惑いを隠せない少年。ひと時を過ごした後、少年が誰なのかを知ったかな子さんは、もう行ってはいけないよと警告を受ける。寂しそうで一人ぼつちの少年に、そのころから惹かれていたのかも

ああ、かな子さんとの境界線がどんどん溶けていく。こんなイメージがすぐに浮かぶ事態は、おかしいとわかっていた。鮮明なのに、

細部が潰れていたイメージ。龐な背景と、少年の顔。彼女の記憶を覗いていたときと、同じ感覚だ。懐かしさと、愛しさと、優しさの詰まった、大切な記憶。私の、宝物。

「好きになってごめんなさい。迷惑をかけて、ごめんなさい」
ハツとして巧は山崎を見た。

「誰かが自分を好きになるだなんて、思えなかったのかもしれないね……」

「そんな！ 私たちは誰もが若様をお慕いしておりました。お優しい若様が、当主になられることを望んでおりました」

きつい奥方様に仕切られた津路崎だが、若様が表へ出られるようになって雰囲気や和らいだ。あまり微笑んだりしない若君は、物静かで勤勉な人だった。奥方様が無理難題を用人に命じても、間を取り持つてくれる。控えめに、遠慮がちにそつと助け舟を出してくれる。無表情だが、優しい人だと誰もが知っていた。彼を嫌う者はいない。

彼の存在が、津路崎の誇りだった。奥方様や滅多に戻らないお館様にとつても自慢だった。彼が風邪を引くと、屋敷中がひっくり返つたような騒ぎになったものだ。

だから、山崎の考えはおかしい。なぜ若様がそんな風に思ふ必要がある。

「でもそれ、伝わってたのかな」

ぎくりとした。いつだったか、あの方と二人きりになったことがあった。

あなたと何年前かに、会っていないだろうか。手ぬぐいを飛ばしたと離れへ来たことが。そう話しかけられて、面を伏せながら、いえ、と答えた記憶。そうだね、俺の記憶違いかもしれないね……。滅多に表情を変えない彼が、そのとき寂しそうに微笑んでいた。

「気安く近づけなかったなら、彼にとつて『若様』と呼ばれることも苦痛だったんじゃないのかなあ……」

そんな、とかな子さんが呟く。

「待てや、山崎。つっ—ことはかな子さんの気持ち、気づいとらんかった言うんか」

「だってかな子さん、拒絶してるんだよ」

「確かに人付き合い苦手そうなタイプやけど……。じゃあ、兵役志願したんは」

「家から離れたかった。自分の意思を貫きたかった。時間を置きたかった。何より、情けない自分を何とかしたかったんじゃないのかな」

うな垂れたかな子さんの感情が、高ぶっていく。手がカタカタと震え、箱を落としてしまった。がしゃん、と音がする。山崎がすぐさま拾い上げた。先ほどの手紙を添えて、差し出してくる。受け取れなかった。一步一步と後退する。宝物だ、と言った箱から遠ざかっていく。まるで、恐ろしいものでも見るように、じっと見つめながら。

巧は、静かに瞼を下ろした。ああ、と呟いて。

「かな子さん。あんた、逃げたんやな」

どくん、と心臓がはねた。

『……………がいます』

「『若様』に、津路崎、周囲の人……何より自分自身から」

『ちがいます』

巧、と山崎が怪訝そうになっている。だが、巧は止めなかった。

繋がってしまったからだ。あの箱は、かな子さんの宝物であり

開けてはならないパンドラの箱だったのだ。どくん、どくん、どくん、と心臓が跳ね回る。いやな汗が、再び吹き出てきた。それでも巧は唇を弧の形に描いた。

「認めとつたら、どうなったかわかっつたんや。だから見てみぬ振りしたんや。自分自身も欺いて。でも『若様』は消えてもった。

周囲にもバレとつた。憎んだ言つとつたな。自分を殺すことで復讐したて。……ちやうやる。かな子さんは見たなかったんや。戻ってきた若様がどんな顔すんのか。自分が逃げたせいで結局、守り

たいもの全部ぶち壊した、その結果から。あんたは後悔したから逃げたんや、自分に相応しない言いながら、真つ向から向き合わんかった」

『ちがう！』

「そうやる！ だから、ごめんなさいで、謝つとつたんや。山崎、さつき言つたことも、かな子さんは薄々感付いとつたんや。わかつて目えそらし続けた。自殺して自分を通した？ 嘘言つなや。あんたは全部投げただけやるが！」

『ちがう、ちがう、ちがう！ 私は、逃げたんじゃない！ だつてどうしろつて言うんですか。使用人の私が、あの方の思いを受け入れると？ どうしようもなかったじゃないですか！ 罰だと言うなら、私はもう受けたはずです。これ以上ない罰を！』

かな子さんの叫びが内側に強く響いた。嵐のように反響し、頭痛を呼び覚ます。くらりと視界が傾いた。強い耳鳴りがした。関節が痛んで、立っていられない。体調の悪化が戻ってきたのだ。しかし、巧は歯を食いしばってそれに耐えた。今、これに屈してはいけけないのだ。かな子さんが必死にふたをしている事実から、逃げてはならない。

「なら……なんで成仏しとらんねん。なんで、忘れとつてん」

復讐や資格がないと言いつくろつていたかな子さんが、ぼろぼろと剥がれていく。残されたのは、怯えて小さくなったただの女の子だけだ。がたがたと縮こまって、耳にふたをして。

「あんたは後悔しとるんや。向き合いたいんや。だから、死んだら関係ない手紙を埋めたんや。いつかちゃんと、開けられるように」

ごめんなさい、ごめんなさいと謝りながら、人目を忍んで、そつと埋めた。目印まで付けた。もしかしたら、本当に死ぬつもりはなかったのかもしれない。『自殺をした』という事実が欲しかったのかもしれない。自分には仕方がなかった。そんな言訳を用意し、周囲へは「あの子はそこまで嫌がつてたんだ」と理解してもらつために。

その目論見がかなったのかどうか、巧にはわからない。だが、逃げた自分を認められずに、何十年も苦しみ続けていたのは確かだ。かな子さんは、山崎と会うまでずっと泣いていた。後悔し続けて、傷ついていたのだ。

「笑い、ますか……、私を。馬鹿なやつだって」

「なんで笑うねん。あなたの誤算はなあ、あなたの想いに男が気づいとらんかったことと、あなたが望んだ平穩は、あいつにとって牢獄やった言うことや。あんたらは、もつと……」

もつと、話し合えていたら良かったのに。

もつと、心を通わせられていたら。

そう言葉にならなかつた。かな子さんの核心をついてしまったとわかつた。彼女はくず折れて、箱を抱き寄せた。封を開けることなく、大切に、大切に想いを仕舞い込んだ。土の中に埋めて、蓋をした。その箱を抱きしめて、声を上げて泣いた。

ああ、かな子さんは、ずつとこうしたかつたんや。

感情を吐露してしまいたかつた。抑圧されて生き続けてきた彼女の精一杯の反抗は、自分を殺すことだった。しかし、大きな声で言いたかつたのだ。好きだと。相手を真つ直ぐ見て、あなたが好きだと。

それがかな子さんの後悔。未練。心残り

封筒には、手紙と曇りのない指輪が入っていた。指輪は、当時としては珍しいもののはずだ。巧の小指にならんとかはまってくれそうなサイズである。シンプルに輝くそれは、いつか二人そろって身につけられれば、と願ったもの。

指輪に添えられた手紙には、突然兵役に志願したこと、想いを告げて困らせたこと、不甲斐ない自分を詫びていた。指輪は、左手の薬指にはめると祝儀を上げたものの証になること。本当はあの日、

かな子さんに渡したかったものであること。しかし、これを持って兵役へ出ることはできず、家に残していくこともできなかつたことが、綴られていた。その上で、我俣を承知で、かな子さんから明確な返事をもらってないこと、戻ったら改めてその返事を尋ねたいとも。

もし、俺を許してくれるなら……この指輪をはめてもらえませんか。

不意にそんな言葉が聞こえた気がした。手紙の送り主は、一途にかな子さんを思っていたのだろうか。

10 私は、幸せ者ですなあ

「だとしても、俺は嫌いだね！」

え、と巧が目を丸くした。かな子さんも巧の中で驚いている。

「自分で決め付けて勝手に戦争マジで行っちゃってさ。残された人の気持ちこれっぽっちも考えてない。こいつ、自分のことで手一杯なんだもん。甘えてんじゃねえよ。相手受け止める余裕なしに告白して、ばっかじゃねえ？ 手紙見ててもさ、何ソレ泣き落としですか？ なんつつつてイライラする。かなさんが好きなら堂々とさらうぐらいの根性見せるよなあ」

がー、と突如山崎がマシンガンのごとき毒を吐く。巧が避難したお陰で無事だが、残してあった手紙を破り捨てそうな勢いだ。よほど腹に据えかねたのか、ぶつぶつと文句を言っている。巧に落ち着けと警告したくせに、かな子さんへの肩入れ具合は、山崎も同レベルのようだ。巧はぼかんとしていた顔を、苦笑に変えた。

「お前……アレだけこいつの気持ちわかる的推論して、それが」

「はっ、気持ちが理解できても、それとこれは別問題。かな子さんに悪いと思つて黙つてたけど、もう無理。我慢できない。腹立つに決まってるでしょ。だけどそんなことより！ 巧、手出して。ちがう、右じゃなくて左手」

有無を言わさない迫力でもって、山崎が指輪をもぎ取った。そして巧の左手をつかむ。巧に待たさえ言わせず、「かな子さんの変わりに、お前がはめとけ」と強引に左手の薬指にはめこんだ。

「かな子さん、巧でごめん。こいつの手でごめん。でもこの指輪、かな子さんのものだから」

銀色に輝く輪は、左薬指の第二関節あたりで止まった。掘り出すために土で汚れて、指輪を取り出すためにさらに汚れた指に、煌い

た。

「お前、なんでこんなに手でつかいんだよ!？」

途中までしか入らないだろうが、と山崎が無理やり巧の指に押し込める。

「いたいたいたつ、痛いわアホ! だったらお前がはめる!」

「俺がはめたつて意味ないだろが! かな子さん、嬉しいか? 嬉しいのか、俺がはめて!」

「抜けんようならどうすんねんっ」

言い合いに水を差したのは、かな子さんの声だった。頭の中で、くすくす笑う彼女の声は、巧を不安にさせた。どこか壊れてしまったような笑いに思えたからだ。かな子さん、と巧が問いかけると、彼女は泣きそうな声で呟いた。

『私もこれぐらい、あのころにはつきり言えたら、よかつたんですねえ。好きなら好き、嫌いなら嫌いって言えていたら。この指輪も……わかつてたから開けずにいたのに。どうして私……ずっとずっと、できなかつたのでしょねえ』

こんな簡単なことだったのに、何十年もかかってしまうなんて。ひびが入ったと思った。それまでギリギリ保たれていた何かが、音を立って崩れていく。ガラスのように、パリン、パリン、と破片となって、欠片となって。もろく、呆気なく、消えていく。

立ちすくんだ巧は、突然左右を見渡した。何かを探すようにおろおろしたが、どうすることもできない。どうしたらいい、どうしたら、と頭を絞るが、何も浮かばない。

「なに、今度はなに!? どうしたんだよ」

「かな子さんが、消える……っ」

巧の中から、どんどんなくなっていくのがわかる。

「うそだろ!? どうして急にかな子さんが」

未練がどんどん消化されていったからだ。途中で気づいたのか、山崎が真っ青な顔で口をつぐんだ。頭を抱えていた巧の手が、そろりと勝手に動く。確認するように指を触り、指輪を触った。愛しい

気持ちを含めて、何度も、なんども。

「いいんですよ、陽ちゃん。ありがとう。巧ちゃんも、ありがとう。無理を……我侬をたくさん言って、二人には迷惑をかけました」

山崎が息を呑んで巧を見る。巧の表面に浮き出ているかな子さんは、静かにその視線を受け止めていた。

「待つてよ。だって、まだお祭り堪能してないでしょ、消えちゃダメだよ！」

「あれで、十分です。お祭り、堪能できましたよ。楽しかったですよ。陽ちゃん、ありがとう」

「嘘だ、かな子さん。だって……俺、何もしてないよ。もつと一緒にしようよ。この世界が楽しいんだよって、ねえ」

「陽ちゃんは、ずっと傍にいてくれましたよ。一人ぼっちだった私の傍にいて、どうして泣いてるのって聞いてくれました。巧ちゃん、出会って間もない私に身体を貸してくれました。二人とも、私のために怒ってくれて、泣いてくれました。嬉しかったですよ」

巧に憑いた彼女は微笑んで、への字口の山崎に手を伸ばした。姉が小さな弟へさわるように髪をなでて、頬に触れ、それからぎゅつと服の裾をつかんだ。山崎が息を呑んだ。陽介さん、とかな子さんの唇が、動く。

「今頃、言っても遅いって、わかってますけれど。もう、あなたはここにはいないんだって、知っていますけれど……。ずっと、言いたいことがあつたんです。いいえ、言わなきゃいけない言葉が」

巧の手が震えている。いや、震えているのはかな子さんだ。にこ、と彼女は微笑んだ。くしゃりと潰れそうなのを、精一杯に笑みの形に変えていた。

「陽介さん、私、あなたのことを、ずっと愛していました。本当はあなたを、待つていたかった」

それを、あの人に言いたかった。

指輪が真つ二つに割れたのは、山崎がその手を取ろうとしたとき

だった。黒ずんだリングが、ぼとりと地面を転がる。ふ、と力を失ってだらりと垂れた巧の腕。割れた指輪を追いかけた山崎の目は、それが風に消えていくのを見た。巧が、がくと膝をつく。

「かな子さん！ 俺、迷惑だなんて思ってたなかった。いっぱい話せて楽しかった。そりゃ呪われてちよつと困ったけど、嫌じゃなかったよ。なあ、聞こえてる？ 今度は幸せになれるから。今度はたくさん幸せになれるから、だから」

山崎が泣きそうな面持ちで、声を張り上げる。憑依が解けて真っ青な顔をした巧が、肩で息をする。ぎり、と奥歯をかみ締めて、巧は拳を握り締めた。

その二人の耳に、届いた。確かに聞こえた。風の音にまぎれて。

はい。私は、幸せ者ですねえ。

ありがとう。ありがとう……

微笑む彼女の姿こそ、見えなかったけども。

汗をぬぐった巧が、「あ」と自分の空っぽの手のひらを見下ろした。持っていたはずのブリキの箱も、巾着袋も、封筒も、いつの間にか消えていた。

かなさんは、この世界から今度こそ、いなくなってしまったのだ。

遠くから聞こえる祭りの音楽が、戻ってくる。虫の音と、葉や草のこすれる音も

「ぐあああ、きもつ。きもい！ 気持ち悪いっ！」

余韻に浸る間もなく声を上げて身体をかきむしったのは、巧だった。

「俺、俺が、うあああ」

意味不明なことを叫びながら転げまわる巧を、山崎が呆れ眼で見下ろした。

「お前、開口一番で言う言葉か、それ」

「こんな目にあっただんは、誰のせいや思つとるんじゃ、こら」

「けっこーかわいかったけどお？ 目え潤ませてさ、『陽介さん、

私、あなたのこと……ずっと』」

「ぎゃああああー！ 言うな、そこ言うな！ 言つとくけど、これは貸しやからな!？」

転がる巧の隣によっこいしょ、と山崎がしゃがんだ。自分の身体をしげしげ見下ろして、

「なんかすつげえ身体軽くなった気がしねえ？ 身体つつーか、気持ち?？」

「そらお前、呪われてたもんな。俺なんか気分爽快レベル？ さっきまでの重たさがどっか行つたわ。あんなんよう背負つてたな、かな子さん」

汚れをはたきながら、巧が身を起こす。それをちらりと一瞥した山崎が、にかつと歯を見せた。

「でもさ、良かったよな。手繋いだけ済んだし？ なんか楽しかったし」

「ふざけんな。こっちは死にかけとつたわ。お前のせいで」

あはは、と山崎が笑う。笑いごとちゃうつちゆうねん、と内心で巧は憤慨した。ないだろうとは思っていたが、抱き合ったりキスするといった展開にならず、本当に良かった。今更ながら肌があわ立つて、巧はこつそり息を吐く。その隣で、山崎の顔が徐々に落ちていく。涙は流れてなかったけど、声が、泣いていた。

「ほんと、よかった、かな子さん。……幸せだって、言ってくれて……」

俺は、何もできなかったけど、と鼻をすすっていた。

山崎は高校へ上がってしばらくしてから、かな子さんの存在を知つたらしかった。忍び込んだ旧校舎奥で、ぼんやりと涙を溢れさせ

る幽霊の彼女が「陽介さん」と呟いていたのがきつかけだったとか。何の目的があつて忍び込んだ、と巧が訝ると、奴は笑つて誤魔化した。

「俺じゃないつてわかつてるんだけど、名前連呼して泣くんだもんよ。たままないじゃん。何とかしてやりたいつて思つてたから」

見上げると星空が瞬いている。彼女が逝つた世界でも、星がきれいであるといい。巧は目を閉じた。そこにもう、彼女はいない。すぐに感じられたあの気配は、欠片も残さず消えていた。

「陽介さん、言つてたな」

うん、と山崎がうなずく。

「お前のことは、陽ちゃんて、言つてたのにな」

うん、と山崎が再度うなずいた。汗で張り付いた前髪をぬぐつて、「巧。俺だけじゃあの人、どうしようもできなかった」

「何言つてるん。お前一人でだつて、何とかなつとつたやろ」

「んにゃ、俺はあの人を、連れ出せなかった。泣いてるかな子さんを宥めるだけで、限界だつたんだ。だから相談したんじゃん」

「かな子さんはお前がおつたから、祭りるとき、あんな楽しそうやつたんや。お前とおつた時間、泣いてへんかつたんやろ。それでええんちゃう？」

うん、と山崎はうなずく。神妙に、かみ締めるように。

かな子さんが山崎を選んだのはおそらく正解だった。かな子さんは、境界を突き破つてくれるきつかけを欲していたからだ。それは、巧では無理だった。山崎が動いてくれたから、彼女の繋ぎとめた鎖を破ることができた。

くたくたの身体を引きずつて、巧は少しだけ笑う。

（なんて、ちよいロマンチックやったかな。あーあ、俺もお人よしやわ）

この一夜限りの不思議とも、お別れか。だから凹むなよ、と山崎をちらりと見る。露骨な落ち込みは見せていないけども。

そのとき、豪快に腹の虫がないた。巧だけではない、山崎も、だ。

二人は顔を合わせた。かな子さんにエネルギーを持っていかれたお陰で、いつも以上に腹が減っている。そういえば、祭りの間はかな子さんを意識するあまり、何を口にしたかあまり覚えていない。時間を確認すれば八時半を回ったところだ。祭りはまだ続いている。急げば、まだ間に合う。

「なんか、食ってくか。的屋行って。残りもんじゃないやろーけどな」

「よーし行くか！ 祭り、まだ終わってないっばいし。でも、その服で行くんだけ？」

山崎に指摘され、巧は気づいた。転がったせいで泥だらけだ。しかも汗で全身がベタベタだった。しばし服を見下ろした巧は「別にええ」と言い切る。着替えに戻る時間が惜しい。それに、

「今日ぐらい、ええわ。ほら、そっちのシャベル持て。用務員室寄つたら行くで」

「でもさー、誰にも見られなくてよかったよなー」

シャベルをかついで先に歩いてきた巧が、凍りついた。山崎はあつからかんと言ったが、考えてみたら男二人で、とても怪しい雰囲気をはら撒いていたかもしれない。しかも夜の学校で、指輪をはめたり、好きだとかなんとか口にしたり。抱き合いかけたり、巧は二人人格の容疑まで

血の気が引いた。

「……誰もおらんかったよな！？ 俺ら以外おらんよな？」

「あー、うん。まあ、いたとしても大丈夫じゃね。大したこたないっしょ」

「大したことあるやろ！？ 特に俺は！ ちょ、山崎、待てやこら！」

腹減った、と平然と歩く山崎を、巧が追いかけ……旧校舎はまた静まり返る。

裏門を越える直前、巧はふと旧校舎の方向を振り返った。特に意識した動きではなかった。木々に囲まれた暗い影が旧校舎だ。あそ

ここに彼女はもういないけど、きっと向いっついで楽しんでてくれるはず。
そう祈りながら。

10 私は、幸せ者ですねえ（後書き）

最後まで読んでくださって、ありがとうございました。
ご意見感想、お待ちしております。

橋高有紀

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3880i/>

彼女の幸福論

2010年10月8日15時14分発行